

第17/18号

1983年
8月6日
500円

ポーランド月報

編集・発行：ポーランド資料センター

東京都千代田区三崎町 2-10-5 -国ビル 3 F
電話03-261-2585 郵便振替 東京2-81069Center for Polish Research % Kazukuni Bldg. 3 F
2-10-5 Misaki-cho Chiyoda-ku Tokyo 101

組合結成は労働者生得の権利である 2
(カトヴィツェにおけるローマ法王の説教)

暫定調整委声明 4
ローマ法王の祖国訪問を終えて
予想される戒厳令の解除について

組合複数制の即時実現を 5

ふたつの祖国、ふたつの愛国主義 6
J・J・リブスキ

労働者階級とともに ある知識人の軌跡

S・バランチャク 24

ワルシャワ裁判に反対する委員会のアピール

..... 33

れんたいニュース 34

ポーランド日誌 35

組合結成は労働者生得の権利である

——カトヴィツェにおけるローマ法王の説教

Homélie, Katowice, 20 juin 1983

Solidarność, Bulletin d' Information, Nr.65, 29.6.83

【編集部注】ローマ法王ヨハネ・パウロ2世は6月16日から23日まで、2度目のポーランド里帰り訪問をし、全国各地で大歓迎を受けた。法王を歓迎した人々は同時に「連帯」旗を打ち振り、Vサインを掲げ、「ソリダルノシチ」「ワレサ」と叫んで、「連帯」に対する深い共感を示した。ここに紹介するのは、6月20日、シロンスクの工業都市カトヴィツェで数十万の労働者、市民を前に法王が行った説教の抜粋である。これは法王が今回の訪問中、最も鮮明に「連帯」擁護を打ち出した説教とされている。

〔訳：水谷駿〕

人間の労働は社会生活すべての中心である。労働の場のすべてが公正な道徳秩序によって支配されている時、それは正義と愛を作り出す。しかしこの秩序が存在しない時、正義の場には不正が、愛の場には憎しみが入り込む。

社会の正義と愛の母としてのマリアの加護を祈ることにより、みなさんたち、親愛なる兄弟姉妹たち、シロンスクと全ポーランドの労働者たちは、労働の場を支配すべきこの道徳的秩序が自らにとつていかに大切なものであるかを示そうと望む。

世界の労働者は、1981年12月以前にポーランドで生じたでき事を感動をもって見守ってきたし、今も見守り続けている。とりわけ世論に大きく訴えたのは、このでき事において問題となったのが、単なる給料の引き上げではなく、何よりもまさしく人間の労働に関わるこの道徳的秩序であったという事実である。このでき事が暴力を伴なわず、誰一人、死んだり血を流したりしなかったという事実も強く心をうった。そして最後に、1980年以降ポーランドの労働者世界のできごとが、それ自体宗教的特徴を有していたという事実。

それゆえに、大きな「労働のとりで」、ここシロンスクにおいて、キリストの母が社会の正義と愛の母として崇敬されていることは何ら驚くべきではない。……

労働は、神に対する、あるいは人類に対する、また自分の家族に対する、あるいは自らが属する

国家ないし社会に対する人間の1個の義務である。

この義務、労働する義務に対応して労働者の諸権利が存在する。それは人権という広い脈絡の中において定式化されなければならない。社会的正義は、所与の社会の全構成員に対する人権の尊重とその実現のうちににある。……

労働組合の問題もまたこの労働者の諸権利の領域と結びついている。この問題について私が「労働に関する回状」の中で書いたことを想起したい。

「……近代的労働組合は、企業主や生産手段の所有者に対し自らの正当な諸権利を守ることを目的とした、労働者の、労働世界の、とりわけ工業労働者の闘争から成長した。その任務は、労働者の諸権利が問題となるあらゆる場において、労働者の生活の利益を防衛することである。歴史的経験が教えるところによれば、このような組織は、社会生活、とりわけ工業化された近代社会の不可欠の要素である。もちろんこのことは、工業労働者だけがこのような組織を結成できるという意味ではない。あらゆる職業の人たちが自らの個別の利益を守るためにこれを利用することができる。実際、農民の組合、知識人の組合……等が存在する。それは、正義のため、働く者の正当な権利のための闘争における、それぞれの職業の多様に対応した代弁者である」（第20項）。

そしてここポーランドにおいても、故ヴィンスキ枢機卿がこう述べている。「問題となってい

るのは、人間が有する自ら結合する権利である。それは誰かから与えられる権利ではない。それは本来的な生得の権利である。それゆえにこの権利は国家によってわれわれに与えられるものではない。国家はただ、この権利を擁護し、それが犯されないよう注意を払う義務を有するにすぎない」(1981年2月の演説)。

それゆえに、この数年間ポーランドでも取りざたされている問題は、深い道義的意味をもつてゐる。それは政府と社会の間の眞の対話の道を通じる以外には解決是不可能である。この間、ポーランド司教会議は何度となくこのような対話を呼びかけてきた。

ポーランドの、そして全世界の労働者は、何ゆえこのような対話の権利を持っているのか。それは、働く人間は生産の単なる道具ではなく、同時に生産の全工程において資本に優先されるべき1個の主体であるからである。人間は自らの労働を通じて、労働の組織と労働の過程、労働の生産物、そしてその分配の眞の支配者となる。人間は、自らが共同支配者であると感じ、みんなで生産したものの公正な分配に自らの影響力を行使しうる時、一定の自己犠牲さえも辞さない。

われわれは、社会的正義の母、マリアに祈りたい。人間の労働の眞の意味と、それとともに人間的存在の眞の意味がかかるつてこの社会的秩序の根本的諸原理が、われわれのところで社会生活の具体的な形をとるよう、と。自らの労働の意味が理解されなければ、その意味がもはや誰にもわかるものでなくなれば、その意味を取り上げられるならば、人間は労働できないからである。

愛は正義よりも大きい。社会的愛は社会的正義よりも偉大である。正義が愛の王国を準備すべきものとすれば、さらに一層偉大なる眞実が存在する。すなわち、ただ愛のみが十全の正義を保証することである。

それゆえに、人権が全面的に保証されることを望むならば、人間が眞に愛される必要がある。これこそが社会的愛の第1の、根本的な側面である。……

社会的愛にはもうひとつ別の側面がある。祖国である。同じ民族の息子たちや娘たちは、文化と歴史の中から自らが得る共有財産の愛の中にとどまり続け、この文化と歴史の中に自らの社会的帰属の支えを見出しつつ、同時に隣人たちや同郷者たちにこの支えをさしのべる。この社会的な愛の輪はわがポーランドの歴史的経験において、またわが現代世界において、とりわけ重要な意味を有している。

亡くなつたすべての労働者、鉱山において死亡事故の犠牲となつた人たち、あるいは悲劇的諸事件の過程で生命を失つた人たちすべてのことを想起しよう。

すべての人たちを。

われわれ、生ける者たちを待ち受けけるものは、労働の福音に結びついた巨大な道義的努力である。ポーランド人の生活の中に社会的な正義と愛をみちびき入れることを目的とした努力である。

聖母マリアの御許に、そのお力添えにより!

この努力のために、そしてこの労苦のために、シチェンシチ・ボージェ(神の御加護あれ)!

[訳:水谷義]



声明：ローマ法王の祖国訪問を終えて

ローマ法王の祖国訪問は、巨大な宗教的、道義的、社会的感動の時となった。法王の言葉はわれわれの胸と心に刻み込まれて永遠に残るであろう。法王の訪問によって、眞実、自由、そして正義という言葉に眞の意味が与えられた。それは民族の主権や社会の独立性、人間の尊厳、人間労働の価値、そして自由な結社の権利を貴ぶすべての人たちを、信条のいかんを問わざりびつけた。法王の訪問期間中、何百万人というボーランド人がこれら諸価値の勝利に向けた、懇に対する善の勝利に向けた、自らの意志と信条を明らかにした。すべてのボーランド人が心の底深くに抱くこれらの諸価値がいかに早くわが国の社会的、政治的生活の基礎を形成するか

に、わが民族の将来はかかる。われわれに宛てた声明の中で法王が強調されたとおり、これら諸価値の復活のためには、われわれの行動における決意と勇気と忍耐が必要である。

1983年7月3日

独立自治労働組合「連帯」暫定調整委員会

ズビグニエフ・ブヤク／マゾフシェ地方

ヴワディスワフ・ハルデク／マウォポルスカ地方

カ地方

タデウシュ・イエディナク／シロンスク・

ドンブロフスキ地方

ボグダン・リス／グダンスク地方

エウゲニウシュ・シュメイコ／全国委員会

幹部会員

声明：予想される戒厳令の解除について

戒厳令解除の可能性と「適切な人道的、法的措置の実施」について触れた政府代表の声明に関連して、独立自治労働組合「連帯」暫定調整委員会は以下のとおり宣言する。

1 現在の情勢の下では、戒厳令の形式的解除は、その下で制定された法令の廃止が伴わないかぎり、実質的な政治的意味を欠いた象徴的ジエスチャーにすぎない。戒厳期間中に制定された法令は独立したイニシアティブと社会的活動をすべて不可能としており、政府に対しては戒厳令下と変わらない権限を保証している。

2 本来社会のものである基本的な労働者の権利と市民的自由の防衛のゆえに戒厳令布告に基づき有罪を宣告された人々の釈放は、当局の恩恵的行為ではなく、不法に自由を奪われた者に対する自由の回復であるにすぎない。

3 今日にいたるまで政府の意図するところは、1980年8月の成果すべてを破壊した統治のシステムの内にはっきりと現われている。政府の権力の基礎は、独立労働組合の活動すべてと創造

的芸術団体の諸活動の禁圧、そして野蛮な弾圧、警察テロの支配、祖国の社会的・経済的危機への転落のうちにある。

4 社会の信頼を1980年8月の残酷の上に打ちたてることは不可能である。このことは、戒厳期間中の人民の態度によって、そしてまた社会が組合綱領で定められた諸任務を遂行したという事実によって証明された。拒否戦線は広大な拡がりを示し、大衆が「連帯」の記念日とメーテーのデモに参加した。さらに、法王の訪問期間中、何百万人という人々が彼らの「連帯」に対する支持を行動で示した。

5 労働者と市民の諸権利のためのわれわれの今後の闘争は、政府が示す政治的現実主義によってその形が決まる。純粹に形式的な戒厳令の解除と恩赦は、われわれに今後の活動を放棄させるものではない。

1983年7月3日

独立自治労働組合「連帯」暫定調整委員会

(以下署名、略)

組合複数制の即時実現を

——各種労働組合共同声明

Joint Statement, May 6, 1983, Solidarnosc News, No. 3

【編集部注】以下は、新労組法により非合法化された各種労組指導者とともにレフ・ワレサが1983年5月6日に署名した共同声明の全文である。なお本誌第16号27頁を参照。

1982年10月8日の労働組合法は、さまざまな労働組合が100年以上もかけて達成してきた成果を抹殺した。新労働組合は社会の広範な支持を得ていない。明らかに政府は、国家=雇用主の後見を得た労働組合に独占的地位を与えようとしている。これは、労働組合の複数制を保証した法律の規定をないがしろにする試みである。このことは、合法的存在を否定された組合の資産の（新労組への）性急な移転によって証明されている。

最近の数年、数ヶ月の諸事件によっていまふたたびその正しさが証明された社会発展の諸法則は、行政的手段によっては目標のことごとく一一とりわけ、社会的意識の変更——を達成できないという、反駁不可能な証拠を提供する。1980年8月以降、われわれは国民の意識と態度の著しい奥深い変化を目撃した。質的な変化が生じた。このことを政府は承認し、考慮しなければならない。

社会の意志を無視することは、政府にも社会にも利益たりえない。社会主義国家は、さまざまな社会的諸集団の基本的な諸利害を考慮したバランスのとれた妥協の上に立つ時にのみ望ましいものたりうる。労働組合の自由の再確立は、眞の国民的合意のための不可欠の要素のひとつとして広く望まれてあり、これのみがポーランドを現在の経済的危機から救い出すことを可能とする。

緊張と社会的不安から解放された経済的に安定したポーランドは、ヨーロッパの安全と平和のための切り札である。このゆえにこそ、国民と国家の根本的な諸問題の解決のために統一して行動することが、今、緊急に、絶対に必要である。

わが祖国の運命に対する深い憂慮に導びかれて、われわれはこの状況を正すために決定的な措置が必要であると考える。とりわけ、
——法律で定められた組合の複数主義の原則を遅滞なくただちに実現すること、

——組合活動や抗議行動、政治的信条のゆえに有罪を宣告されたすべての人たちの釈放、

——組合活動ないし組合加入を理由に解雇された人々の復職。

この書簡が1980年8月後の時期のさまざまな労働組合グループ——自立労働組合、産別労働組合、全国教員組合、そして「連帯」——の代表者によって共同で署名されているという事実は、複数主義に基いた労働組合運動が労働者世界と国民および国家の基本的関心の対象となる諸問題において、合意の形成が可能であることを証明している。

1983年5月6日

アルビン・メルツェル 1980年、建設産業・協同組合労働者独立自治労組（産別労組加盟）全国指導部に選出。

ヤン・シモン 1981年1月、金属労働者組合（産別労組）全国指導部に選出。

レフ・ワレサ 1981年10月、独立自治労組「連帯」議長に選出。

ヤツエク・マルケル 1981年10月、独立自治労組「連帯」全国委幹部会員に選出。

スタニスラフ・ルシネク 1981年6月、独立自治労組「連帯」マゾフシェ地方委員会（ワルシャワ地区）幹部会員に選出。

アントニ・ロバタ 1981年6月、全国教員組合議長に選出。

ヤン・トリンコフスキ 1981年6月、全国教員組合一般評議会に選出。

ボグダン・マイトフスキ 1980年10月にコンピューター・アナリスト独立自治労組議長に選出されたのち、1981年11月、自立労組連合作業部会に選出。

ボグダン・ステルマハ 1981年3月末に社会保険従業員独立自治労組全国指導部議長に選出されたのち、1981年11月、自立労組連合作業部会に選出。

ミハウ・スラフスキ 1980年11月に酪農協同組合労働者独立自治労組全国指導部議長に選出されたのち、1981年11月、自立労組連合作業部会に選出。

ふたつの祖国、ふたつの愛国主義

—ポーランド人の民族的誇大妄想と外国嫌いに関する考察—

ヤン・ユゼフ・リップスキ

DWIE OJCZYZNĘ - DWA PATRIOTYZMY

Uwagi o megalomanii narodowej i ksenofobii Polaków
"KULTURA"

Jan Józef Lipski

祖国とは、異国が存在してはじめて存在する。“よその”がないところに“自分たちの”はない。愛国主義の形態は、“自分たちの”ものとの関係にというより、“よその”ものとの関係にむしろ左右される。自己と他民族への愛情が、他国や他民族との関係によってはじめて規定されうるという点にはつねにある種のパラドックスが存在する。しかしそれは、あらゆる知性的、感情的分類につきもののパラドックスである。

“自分たちの”とは誰をさし、“よその”とは誰をさすのか？ “私の”国と、私でのない国の違いは何なのか？ 私の民族と私でのない民族の違いとは？

これらの問い合わせているのは、その差異の客観的説明ではない。たとえば、われわれはポーランド語を話すが“彼ら”は別の言葉を話す、とか、われわれは“彼ら”とは違う文化構造の中で暮らしている——なぜなら、われわれは10世紀に西からキリスト教を受容したし、ルネッサンスや啓蒙主義やロマン主義も西からやってきたし、たとえわれわれのうちの誰かが、人類が生んだ最大の詩人はゲーテだ、ダンテだ、いやシェークスピアだと言ったところで、ミッキエヴィチやスウォヴァツキはどこかしら違った形でわれわれの中にしみこんでいる（もしくはわれわれが彼らに思い入れしている）し、また、われわれにとって隸従とそこからの解放の闘いの年月は永遠に民族の記憶に根を下ろしているから、とか、ポーランド的民族性というようなものでわれわれを大体において特徴づけることができるとか、そういった問題ではない。問題なのはそうした説明的事項ではなく、価値と評価である。はたしてわれわれは自分たちを他に比べてより優れていると考えているか（また、だとしたらどのような）？

われわれは自分たちに何らかの理由で特別の権利や特權を得る——また義務を負う——資格があると考えているか？ これらの問い合わせへの答え方に応じて、われわれは様々な愛国主義を信奉している。極端な言い方をすれば、われわれは様々な祖国に属している——もしも祖国というものが単なる民族的帰属といった事実でな

しに精神的な宝であり価値であるとしたならば。

祖国の問題を見る際に依って立つべき価値体系は、何よりも道徳的価値体系である——それのみであるとは言わないが——。われわれは主にキリスト教によって形成された倫理觀を持つ文化圏に属している。信者にせよ非信者にせよ、われわれは隣人愛の教えというわれわれの文化の基本的な道徳的道しるべにそって育ってきた。こう言っても、私は他の宗教や他の世界観の道徳上の成果に重きをおかないわけではない。キリスト教の母体であったユダヤ教や、イスラム教、仏教、ヒンズー教、中でもとりわけ世俗的な儒教倫理などなど——これらもまた倫理学の分野では大いに評価に値する成果を生んでいる。われわれの文化圏でも、非宗教的・世俗的動向を代表する思想家たちもまたわれわれの倫理的省察や意識を豊かにしてきた。それでもやはり、われわれはまず第1にキリスト教にはぐくまれてきたし、——その倫理の基本理念にとどまっていると望んでいる。

ショービニズム、民族的誇大妄想、外国嫌いすなわちあらゆるよそのものへの憎悪、民族エゴイズム——これらはキリスト教の隣人愛の教えと一致し得ないと私は考える。一方、愛国主義は——一致し得る。家族への特別の愛情が隣人愛を損いはず、また損ってはならないのと同じに、同一の民族共同体の成員への特別の愛情もより上位の道徳規範に従わねばならない。愛国主義は愛からでて、また愛へと導くはずのものである。それ以外のあらゆる形の愛国主義は、倫理的奇形である。

ショービニズム 排外的愛国主義と愛国主義

“ポーランドのすべてものへの愛”とはしばしば言われる民族的定句、“愛国的”愚かさの定句である。なぜなら、われわれの歴史のわずか20年ほどをとりあげてみるだけで、ONR〔極右の民族主義政党〕もルヴィフやブシティクやキエルツェのボグロム〔ユダヤ人

大虐殺)も、ゲットーも、ウクライナの農村鎮圧も、ブジェシチも、ベレザも、1920年代のヤブウォンナ収容所も、みな“ポーランドの”行為だったのだ。愛国主義とは伝統を愛し尊ぶだけではなく、その伝統のひとつひとつをきびしく選択することであり、その面で知的考察を行なう義務なのである。過去に偽りの評価を与え、道徳的に誤った民族神話を守りつけ、民族的誇大妄想を利するため白民族の歴史上の汚点を黙過する罪は、おそらく道徳的にみれば隣人に悪をはたらくよりも小さな罪かもしれないが、しかしそれは現在の悪を認めてしまう前提条件であり未来の悪につながる道なのである。

われわれはヤツヴィングたちの火と剣による征服を思い起こしたがらない。それは、かつて誰をも征服したことがないと称するポーランド民族像をぶち壊しにするからだ。われわれは、白旗を掲げたヴィエルキエ・ウーギの守備隊を皆殺しにしたことを歴史概説に載せたがらない。なぜならそれはわれわれの歴史の自称人道主義的性格に不都合だからだ。われわれは、ウクライナの反乱や蜂起をどのように鎮圧したかを、われらが民族的英雄ステファン・チャルニエツキの遠征が村から村へ赤子さえも虐殺してまわったことを、数百年にわたってポーランド - ウクライナ間の歴史を陰滲なものにした相互報復の気違いじみた繰り返しを、忘れている。われわれはポーランドの寛容さを自慢する——だが、それがいつどのようにして終わってしまったかはもぐもぐと口の中でつぶやくだけだ。われわれはナポレオンのスペイン戦役に加わったポーランド兵の悲劇を吹聴する——あたかも、自国の独立を守ろうとするスペイン兵たちを打ち破ったことが名誉のしるしであるごとく。だが一方、われわれはサラゴサの恥を忘れよう、もしくはごまかそうとしてやっきになっている。両大戦間期の20年間のこととはすでに述べたとおりである。

われわれはこんな態度ではない。沈黙のひとつひとつが民族的誇大妄想の火に油をそそぐことになる。沈黙は疫病である。自分たちの罪を認めぬことは民族の精神を堕落させることになる。

ポーランドの歴史文学にはふたつの伝統がある。ひとつは民族的誇大妄想をあおるもの、もうひとつはジエロムスキの伝統、つまりものごとにきっちりとした決算をつけてきた苦汁に満ちた伝統である。後者において、サラゴサは民族の悲劇であると同時に恥である。ポーランドを分割したオーストリアは分割領に一定の発展をもたらす立法を与えたとされている。1月蜂起の時代のポーランド農民は、“爱国的”姿からはほど

遠い自然な真実の姿に描かれている。独立ポーランドとその権力機関は、「早春」の中ではきびしくかつ警告的に非難されている。われわれはジエロムスキと彼の作品に体现された愛国主義に立ちかえらねばならない。アンジェイ・ワイダが、彼がジエロムスキの中に見出したまさにそのことのために“爱国的”立場の人々から攻撃され、「われらを啄む鶴たち」の作者の作品がモチャル主義はなやかなりし時期に歴史文学の読本のテーマにされたのは、1960年代のポーランド人民共和国のバラドックスなしにはできないことだった。

“爱国主义”的”あらゆる新手の攻撃を監視し、疑いの目で見つめよう——もしもそれがお気に入りの民族的誇大妄想のスローガンを無批判に繰り返すものならば。美辞麗句や愛らしい小道具の後ろには、さてさて魚どもは槍騎兵の軍帽や軽騎兵の羽根飾りや蜂起軍の迷彩服にひっかかるかいなど目を輝かす社会操作者どもがひそんでいるのだ。「その姿は沼に似て、ほんの偶然も、深みへ深みへひきずり込む」——ミウォシュが『モラルの協定』で書いた言葉である。

公式報道に使われる祖国への愛国的美辞麗句はもうずっと昔から、愚民向けのお伽話や作りごとを打ち破ろうとする人々への迫害と表裏一体をしてきた。カジミェシュ・ブランディスの『郵便屋変奏曲』に対する攻撃は、特に私の記憶に残っている。この作品は彼の著作の中でも最も野性的で最も洞察に富んだもののひとつである。が、ひどく“爱国的”なジャーナリストや批評家の一群がよってたかって、われわれの過去をあざけり笑いものにする男として彼をこきおろした。驚くべきことだ。ブランディスはポーランドの一家族の運命を鋭い筆致で描き出した。その家族のどの世代もが民族と運命とともにし祖国独立の戦いに飛び込んでゆき、そしてどの世代も敗北を喫しては貧困と病と社会的・精神的落伍につきおとされる。民族全体とはいわぬまでも少なくとも自覚を持ったエリートの運命について言えば、ここに描かれたことはまさに悲劇的真実である。私はこの本を、民族の敗北の歴史をつづった歴史書を読むかのように、とりつかれたように読んだ。われわれの歴史の悲惨さがあらためて身にしみた。その後で、『郵便屋変奏曲』の作者は過去をあざけり、笑いものにしていると聞かされた。どんなテーマにどんなユーモアを感じとるかは人それぞれなためだろう……。

このキャンペーンは——他のキャンペーンも同じだが——大体において、忘れもしない1968年にわれわれがなじみとなったのと同じ雑誌上で、ほとんど同じ書き手たちの手によって遂行された。ソビエトの召使



リブスキ

いが槍騎兵の服を着込んでいた……。

このことはしかと考えねばならない。この“ラコヴィエツキの槍騎兵たち”（ワルシャワのラコヴィエツキ通りには内務省がある）はどんな役目を果たすべきなのか？ 彼らは誰の頭を混乱させ、“愛国的”な餌で誰をおびきよせ、誰にショーピニズムという毒を盛ろうとするのか？ そのことと祖国愛とにどういう共通点があるのか？ そして、それはどんな祖国への愛なのか？

古いロシアの文句「ユダヤは殴れ、ロシアは肥えさせろ」がわれわれの目の前で復活した……。ツァーの時代、ロシア保安部の時代。本質的にはやり方もそう変わってはいない——少々“爱国的”カムフラージュがほどこされ、その点では新しいスタイルになっているが。ONRも“爱国的”だ——しかしこちらは主權なき国家の国家的反ユダヤ主義だが。「ロシアを肥えさせろ」。

もしこれが公式報道だけの問題であったなら、もし誰ひとりこんな“爱国的”餌に食いつかなかったなら、もしポーランドの伝統に、そういうものに音叉のように敏感に共鳴しだす素地がなかったなら、——私はなにもそれについて書いたり論争したりしなかったろう。民族的誇大妄想と外国嫌いの特徴は、無検閲の真正な報道メディアにも散見される。

ここではっきり言わねばならない。対話がいつでも可能なわけではない、しばしば対話をしようとの試みは（愚行でなかったとすれば）恥辱でもあった。反ユダヤの蛮行の英雄たちと、“3月事件後の”メディアの中で対話するのは不可能だ——また、そういういやしい時事評論にわが意を得たりと思っている人々とも

対話はできない。われわれとその人々とには共通の祖国もないし、そもそも彼らとの共通点など何ひとつ持たたくない。しかし、スウォニムスキ、オッソフスキ、ヤシェニツァ（互いにかなりかけはなれた作家たちの名を並べたが、彼らは同時に人道主義と愛國主義において共通分母でくくることができる。彼らは今日の民主的反対派の最も近しい思想上の守護者であり、共同創作者できある）の愛国主義と、フィリップスキ、ゴンタシュ、コンコルといった連中の“愛国主義”の間に、ぎっしりと民衆がつまつた広大な空間が広がっており、その民衆をめぐって闘いが繰りひろげられている。人々はどちらの祖国を選んでいるか？ 外国嫌いと民族的誇大妄想の中毒にかかった人々、しかしまだ憎悪とうぬぼれに理性と感情を回復不能なまでに変質させられきっていない人々、その人々を見捨てることはいかなる理由があろうとも許されない。ポーランドの愛国主義の形をめぐる闘いはわれわれの民族の運命にとって決定的なものとなる——民族の道徳的、文化的、政治的運命にとって。

ドイツとの和解

外国嫌いと民族的誇大妄想は、共生し相互扶助している。われわれはポーランドがどんなにロシア人やドイツ人に苦しめられたか知っている——しかしそれはロシア人やドイツ人をばかにしたり憎んだりするのを正当化はしない。人も民族も、愚弄や憎悪を持てば自身をも傷つける。1940年代、ファシスト化したウクライナ人はわれわれをひどい目にあわせたが、彼らにとっての被害と加害の勘定書きは少なくともど

イツ人のそれとは違っており、ウクライナ人の日常的ポーランド観にはあまりいいことがない。しかしポーランド人はなぜあもしぶらにチェコ人を軽蔑するのか？ 外国嫌いが見きかになさと結びついた例を、われわれは〔1968年〕8月のチェコ介入に見ることができる。この時われわれの同胞の一部は、道徳にもまたわれわれの民族的利害にも反すること、すなわちチェコに対する介入に内心で同意したのであった。

大部分のポーランド人のドイツ人とロシア人にに対する関係に話を戻そう。ここで再び、人や民族が他を愚弄し憎悪すれば、自ら自身を傷つけることになる、と繰り返さねばならない。しごく都合が良いからといって目前にある道徳的問題を認めずにいることは、道徳的堕落を招く。ドイツ人に対してわれわれは積年の大きな恨みがある。厭世させようとしてわが国を侵略したのはドイツの皇帝たちであって、わが国が侵略したのではない。チュートン聖母十字軍騎士団はプロシアやリトワニアやボモージェやポーランドの人々にとって悪夢であった〔13～14世紀〕。ブロイセンはロシアおよび同じくドイツ語を話すオーストリアと共に、ポーランド共和国を分割した〔18世紀〕。土地剝奪と追放、「ハカタ」⁹⁶、ブロイセン占領下での民族的・宗教的迫害などは、第2次大戦中のドイツの行為の最初の予告であった〔19世紀〕。ポーランドにおけるヒトラーの大量虐殺はあらためて言うまでもない。しかし、われわれがキリスト教倫理と西欧文明の範囲内にとどまることを望んでいた以上、こう口にする瞬間がやって来なければならなかった——「われわれは許す、そしてどうかわれわれを許してほしい」。それを言ったのは、国民が占領下にいた状況下でわれわれに残された最大の独立した道徳的権威——ポーランドの教会だった。実際の被害にもとづくあらゆる怨恨を超えて、われわれはこの言葉をわれわれ自身のものとしなければならない。それを受け入れるには、その道徳的意味だけで十分だろう。しかし道徳的意味とならんで、民族的・文化的意味もそこには含まれている。西地中海文明圏への帰属意識を持った民族として、われわれはより大きな祖国、ヨーロッパに帰ることを夢見ている。それゆえ、ドイツとの和解は必要なのである——ドイツ人はヨーロッパにすでに属しているし、今後ともそうであろうから。ポーランド司教団がドイツ司教団へ両手を差しのべたことは、ポーランド戦後史の中で最も大胆な、最も将来を考えた行為だった。

しかしドイツ司教団へ向けたポーランド司教団の声は、キリスト教に忠誠であり続けようとするならば避けて通れぬひとつの問題を提示した——ドイツに対す

るわれわれの罪の問題を。ポーランドではそういう問題のたて方は受け入れられない。たしかに、彼の行為の割合がおそらく不均衡なことを考えれば理解できぬことではない。だがしかし、いかに他者と比較にならぬほど小さいものであっても、自己の罪の軽視を認めてはならない。

われわれは数百万の人々から祖国を奪ったことがある。その数百万のうち、ある人々は彼らの國が戦争をしていた時にヒトラーの支持のもとに悪事を働いたためであり、ある人々はその犯罪行為を消極的に認めたゆえであり、またある人々はただ、恐ろしいテロ機構との闘いという英雄的行動に加わらなかつたというだけの理由で。われわれがこうむつた悪の最大のものといえども、われわれ自らが行なつた悪を正当化するものではないし、正当化させてはならない。人々を家から立ち退かせることは最大限好意的に見ても比較的小い悪というだけで、決して善い行為ではない。2度の分割を受けた民族がさらにその代償も全部かぶることになればたしかに不公平である。しかし、より小さな不公平——のようにみえる方——を出口として選ぶこと、より小さい方の悪を選ぶこと、それは道徳上の問題に対する感覚を麻痺させる。悪は悪であり、善ではない——たとえより小さな、避けられぬ悪だととしても。難題である——キリスト教徒たらんと欲するか、否か。もしうそ欲するなら、その者は次のことを知っているはずだ——共同責任原則はわれわれが信じている倫理と何ら一致するところのないこと、たとえわれわれが小さい方の悪を選ばねばならないとしても、悪をとして善と呼んではならないこと、相手がかつてわれわれに100倍もの悪を行ない、おまけに償いの必要をほとんど感じていないような場合でも、われわれが悪をなせば道徳的の負債が生じることを。

より小さい不公平の根本的理由、すなわち第2共和制〔1918年～第2次大戦〕の領有していた祖国の東側領土からやむをえず離ねねばならなかつた数百万のポーランド人の生活を保証してやる必要性——それが、現実に起こったことに対する唯一の説明である。歴史的理由——後でみると非常に非常に疑わしいものだが——も倫理的理由も、それを正当化しない。例外はオポーレ地方くらいだろうが、これにも議論の余地がある。ヴァルミア地方やマズール地方を旅してみたまえ。そこで何人の原住ポーランド人、いわゆるマズール人やヴァルミア人に会えるか、自分の目で確かめるとよい。まして、民族の倫理が民族主義に毒される徵候として、たくさんの論文が次々とあらわれ、作者たちが、第2次大戦前——ということは独軍ポーランド進攻の前、

数百万のポーランド市民が殺される前、東部国境地帯から追われた数百万のポーランド人に生活の場を与える問題の起こる前——に彼らの属していた政治グループがシチェンとヴロツワフを含むオーデルーナイセー^一帶がポーランド領であると主張していたことを自慢するとなつては、不安は増すばかりである。それらの論文は興味深い事実を述べているのではなく、当時の政策——キリスト教倫理にもとづいて諸民族間の関係をうちたてるという原則に反した侵略的計画——の承認である。このイデオロギー史上の汚点のエピソードを贅辞をつけてむしかえすることは、倫理的堕落のきざしであると同時に政治的痴呆化だ。

われわれの対独關係意識の中では、大量の神話と誤った認識が育ってきた。それらはいつの日にか打ち消されねばならない——眞実の名において、自民族みずからを癒すために。自分たちの歴史に関する誤った認識は民族の精神の病いであり、外国嫌いと民族的誇大妄想の温床である。

教養ある人々を含むほとんどどのポーランド人が、われわれは第2次大戦後、それまでドイツに奪われていた土地に戻ったと信じている。グダンスクとヴァルミアについては、それは当たっていないかもない。そこはトルン講和(1466)からポーランド分割までポーランド共和国に属していた——もっとも、グダンスクもヴァルミアも第2次大戦終了までは民族学的にはドイツ人が大部分を占めていたが、このふたつ以外の東プロシアはかつて一度もポーランド領ではなかった。ドイツ人はポーランド人からなく、リトワニア人の血を引くプロシア人から土地を奪った。その地で少数派(いずれにせよ彼らは自分たちの數的存在にはほとんど無自覚だったが)のポーランド人(マズール人)は、もとからそこに住んでいたわけでなく、主にアルブレヒト・ホーエンツォレルンがポーランドから移住させたよそ者だった。西ボモージュ(民族学的にはポーランド人地域ではないが、スラブ族ではある)は、ポーランドへの服従を強情に何度もかねのけて独自の国家体制をうちたて、17世紀になってスウェーデンに亡ぼされた。ポーランド人が住んでいなかったその土地を、プロイセンはスウェーデンから——ポーランドからではない——手に入れた。西ボモージュのドイツ化は暴力的強制なしに自然におこなわれた。シロンスクは中世のころすでにチェコ人に征服され、チェコとともにオーストリア帝国の一部となった。18世紀になるとプロイセンがその地をオーストリアから——ポーランドからではない——奪い取った。そのころはすでにドシリ^二ンスクでも、強制によらない自然な形でのドイツ化が

かなり進んでいた。シロンスク・オポルスキ〔オポーレ周辺〕と上シロンスクは民族学的にはポーランド色を濃く残していた。この地方でドイツ化の圧力が組織されてある程度効果を生むのは19世紀後半から20世紀になってからである。

にもかかわらず、われわれは今だにこれらの土地に数百年にわたってドイツ文化が花咲いたことを思い出したがらない。シロンスクのピアスト家の人々や、彼らの城や宮殿についての感傷的な文章はわれわれの目にに入る。だが、ヘンリク・プロブスがドイツの文学教科書の中でミンネゼンガー(中世ドイツの恋愛歌人)として知られ、ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデやヘルマン・フォン・アウエと同じ言葉(ドイツ語)で詩作をしたと書かれていることを、そしてポーランドの恋愛叙事詩が成立し開花するのはその2世紀後だということを、口にする者は誰もない。彼(ヘンリク)はシロンスクの歴史では形ばかりの人物である。

シロンスク、ルブシュ地方、ヴァルミア、マズール、グダンスクでポーランド文化と並んでドイツ文化が発展し(グダンスクでは圧倒的にドイツ優勢)西ボモージュでは昔からのドイツ文化のみが栄えた時期の後、歴史の変遷の贈り物としてわれわれにはドイツの建築その他工芸の豊かな遺産とドイツの歴史の形見が与えられた。われわれは人類に対してこの財産を預っている。嘘をつたり沈黙したりせず、自覚をもつてこのドイツ文化の遺産を守る義務がわれわれにはある。未来のために(それはわれわれの未来でもある)この財産を守る義務が。

ポーランドには、ヴィルヘルムのドイツの愚かしく犯罪的な神話体系に発した東方植民神話が古色蒼然と残っている。ポーランドの時事評論でもこの神話が使われることについてはアントニ・ゴウビエフが『ティゴドニク・ポフシェフヌイ』で断罪した。その論文はほとんど顧みられなかつたが、ポーランドのインテリの必読文献に数えられるべきだ。第1共和制[18世紀以前]の西側国境は、長い間ヨーロッパで最も平和で安定したものとのひとつだったことが知られている。ドイツ騎士団領からの侵略は、ドイツ中世史のほんの一部分でしかない。

にもかかわらずわが國の人々は、ドイツ人のおかげで得られた文明・文化的なものについて書いたり語つたりしたがらない。屋根やレンガ、石工、印刷屋、画家、彫刻家、ポーランド語の中の数百の単語——これらはわれわれが西側の隣国のおかげで何を得たかを証している。クラクフをはじめとする多くのポーランド

都市における、建築、彫刻や絵画その他の芸術、手工業の見事な業績は、中世のみならず19世紀に至るまで生み出されたものであるが、これらは多くの部分を入植してわれわれボーランド人の文化を多彩に発展させたドイツ人に負っている。ボーランド人なら誰でもヴィト・ストフォシュを知っているだろうが、民族的血統でいえば彼がドイツ人だったこと（この問題についての最終的な証明をボレスワフ・ブシビイシェフスキ公の著作によって示した点でボーランドの學問は称赞に値する）を知る者は少なく、多くの人が彼をボーランド人と思っており、異議を唱える者は平手打ちをくらいかねない。また、われわれの文化に不滅の足跡を残した数百あるいは数千のドイツ人芸術家の名前は専門家でもない限り誰も知らないのである。

歴史は未來への門口でなければならぬ。われわれは未來へのシンボルとして何を選ぼうとするだろうか。グルンヴァルト（15世紀、ボーランド・リトワニア・ルーシ連合軍がドイツ騎士団を破った地）？ それともレグニツァ（ボーランドとドイツが共にバツー率いる蒙古軍を迎え撃った地）？ グルンヴァルトはもちろん永久に民族の記憶にとどまるだろう。しかしグルンヴァルトだけにその資格があるのか？ 第二次大戦中、ヒトラーによってボーランド文化は破壊された。が、ヴィト・ストフォシュや彼ほど有名ではない何百人の素晴らしい芸術家たちの力でボーランド文化が豊かにされたこともわれわれの意識を占めるべきでないか？ オシフェンチム【アウシュヴィッツ】と言うときわれわれはただドイツ人処刑吏のみを思い浮かべるのか、それとも牢獄につながれ、また強制収容所の一員として悪と闘ったドイツ人もわずかながら存在したこととも思い出すだろうか？（私は、十数年前にロンドンで出版された亡命作家・歴史家ユゼフ・ガルリンクスキの著作『闇うオシフェンチム』という資料をもとに書いている。だがボーランド税関にかからばこの本は国境で没収だ）。われわれの意識の中のドイツ人はゲシュタボやSS【親衛隊】でしかないのか？ 戦時中の暗黒の中、あらゆる闘いの中で最も困難な自分の、國との闘いを行なったミュンヘンの「白バラ運動」の英雄たちはドイツ人ではなかったのか？

「白バラ」は、眞のキリスト教徒の向こうみぎなグループだった。彼らは出来うる限りの行動を行なうことで、当時の大多数のドイツ人と違って彼らが名前だけのキリスト教徒ではないことを、そして真実と善のあかしのために殉教もいとわぬことを示した。彼らがボーランドと直接的結びつきを持たなかつたとはいえ、彼らへの賛辞はわれわれの内にも抱かれるべきである。



ナチスとソ連がボーランドを占領した1939年を
ボーランド人は忘れていない

なぜなら第1に彼らはまさしくドイツ人であり、第2次大戦で何百万の人を殺したと同じ民族に属する人々であるゆえに。第2には彼らがわれわれに倫理的手本を示した、つまり、自民族と国家が悪と犯罪の道へ踏み込んだ時には、民族と国家が内戦を行うことになるとも悪に反対することが道義的義務である、としたゆえに。「白バラ」の英雄たちはドイツの愛国者と呼ぶにはふさわしくないのだろうか？ 彼らは民族の裏切り者か？ いや、反対に彼らこそが民族の尊厳と道義の残り火をかろうじて救ったのであり、彼らこそがドイツの未来に多くのできぬ高い誇りを作りだしたのだ。彼らは不幸にも当時のドイツに生き、殉死したが、心の中には別の祖国を抱いていた。

かなり多くのボーランド人がドイツ人に対して抱いている恐れや不信感も、たしかに理解できる。ビスマルクとヴィルヘルム1世時代以来——なんならもっと早く、19世紀初め以来と言ってもよい——積もり重なって来たドイツ民族主義の毒素が、ドイツ人の意識や対ボーランド観の中ですでに跡形もなく消えてしまっていると考えるのは、軽率で愚かに過ぎよう。ドイツ人の一部にみられる再び犯ちを繰り返す潜在的可能性を注意深く見守るようわれわれを促す事実が全くないわけでない。（もっともわが国の当局側宣伝ではドイツの現状よりかなり誇張して話がばらまかれている）。しかし同時に、両民族を結びつけるための最善の条件をわれわれの側で整えるため、われわれは最大限努力

しなければならない。それを可能にするため、なによりわれわれ自身の内面や歴史意識を変えていかねばならない。

ロシアに対するわれわれの優越感

平均的ポーランド人のロシア人にに対する意識は、ドイツ人に対するそれとは違っているようだ。ドイツ人に対しては、恐れの混じった多大の憎しみがその中心であるが、また大きな敬意も持たれている。ロシア人に対しては、やはり憎しみ（おそらくドイツ人に対してよりは根深くなく、より厳しくない憎しみ）と恐れ（ポーランド人叛徒を砲撃したソ連戦車の悪夢から来た恐れ）があると並んで、軽蔑と優越感を抱いている。なぜそうなったのかは悪魔のみぞ知るだが、ポーランド人は一般にロシア文化をポーランド文化より程度が低いと信じている。民族というものは多くの点で人間の人格に似ている。ちょうど、キリスト教倫理の中で意識を持って育った人にとって、その倫理を受容している人は誰でも、頭の良し悪しにかかわらず、同じだけの価値と尊厳を持つと理解されているのと同じく、それぞれの民族は、かつてナチズムにとりつかれたとか芸術的に栄えているとかに關係なくそれぞれ固有の価値と尊嚴を持っている。リトワニアにはミツキエヴィチやスウォヴァツキに匹敵する詩人やヴィスピアンスキに伍する劇作家はいなかったことを私は知っている（もう少しくわしく言えば、キュルリオニスは当時の世界有数の画家に数えられると思う）が、リトワニアの民族文化に軽蔑を感じたりはしない。なぜそういうのかを考慮するのはこの論文の本題ではない。おそらく、リトワニア文化の中で生活している人がその文化の中に、自分の人間性を十全に開花させるしっかりした土台を見出していると私が知っていることに關係あるだろう。しかしそれならなおさら、ポーランドのロシアに対する文化的優越感がどこから生ずるのか不思議である。

ドストエフスキイ、トルstoi、そしてヨーロッパ文学に誇りうる20人を超す作家を生み、ルブロフ、メンデレーエフ、ストラヴィン斯基を生んだ民族に対して文化的優越感を抱くということ——これは実に不可解である。彼らは、われわれの文学がまだひどく貧しく絵画は稚拙であった頃に民族叙事詩と見事な教会壁画を生み出した民族である。ドストエフスキイ、トルstoi、ツルゲーネフ、チェーホフほどに西欧文学に——われわれが属したいと望んでいる西欧の文学に——影響を及ぼしたポーランド人作家はいない。ボ

ーランド農民の精神文化がロシア農民のそれより優れていたことを示す証拠など何もない。むしろ逆であることもある。多くのポーランド人のロシア人に対する誇大妄想的優越感には、グロテスクと哀れさが混じった何かがかくれている。

この態度はしばしば別の側面にも根ざしている。ポーランドの考え方には昔から、つまりロマン主義時代以来ひとつの概念構造があり、それによるとロシア文化はビザンチンとモンゴル＝タタール（ツラン）の影響が交差して2重に——そしてマイナスに——条件づけられているということになる。この分野では最近、無検閲の出版物におけるフェリクス・コネチヌイの考え方方が脚光を浴びているのが目につく。思い切りはしょって言えば、ビザンチンとツランの交差の結果、位階的権力に個人を従属させるのが当然であり、集団が個人に優越し群集倫理が個人の倫理に優越するような文化化ができたという考え方だ。

この手的一般化はいつもそうだが、この考えもまた我田引水であり、多くのことを認めようとしない。モスクワ公国專制政治の伝統は、何かしら中国政治の遺伝子を受けついでいるであろうし、その体制内でのツァーと宮廷の地位や役割はたしかに意識的にビザンチンを範としていた。しかしそのよそからの伝統に対し、ロシアの中には別の伝統、クルプスキー公やさらに前からの精神的独立の伝統、他からのものに和合せず西欧に思想的支持を求める伝統もあった。ロシア・デカブリスト、ゲルツェン、ベスキシンやその他の1月蜂起の参加者、「土地と意志」、ナロードニキ——彼らはビザンチン＝ツラン的なロシアではない。現代でもロシア人はサミズダート（地下出版）というわれわれもしばしば用いる言葉を生み、最初に使い、道を示し、大きな代價を払った。偉大なサハロフの委員会はわれわれに啓示を与え、手本となっている。そのうえ彼らの国では状況はより困難であり、より大きな勇気が必要とされる。

ソビエト全体主義からの東欧全体の解放は、主としてソ連内部の解放運動にかかっていることを肝に銘じよう。帝国内で最大の人数を擁し最大の役割を演じているロシア民族は今日なお民主的権利を自らのものとして求めることにうとい。同時に、抑圧された民族として当然のなりゆきで特に道徳的に堕落している。そこでは新しい現象、つまりソビエト「愛国主義」（残念なことにこの現象はロシア人に限ったことではない）が盛んになる。そこでは衛星国を鎖でつないでおく介入・鎮圧政策の支持者がいくらでもいる。そこではソ連邦内の諸民族の民族自決権は実現可能などとちよつ



NIEZAWODNE OGNIWO ! 信頼の絆

とでも言及しようものなら大変な怒りが噴き上がる。それゆえ、自由のために闘っているロシア人への敵意（グロテスクで愚かな優越感をぬぎ捨てた敵意）はますます大きく、彼らとわれわれの兄弟的関係はますます活気を増すべきである。数年前はまだポーランドでも政治体制や全体主義に反対する勇気を持つ人はそう多くなかった。その勇気を持ったロシア人の数を知り弾圧の厳しさを比べるならば、彼らを称賛し尊敬できるだろう。

彼らはわれわれより困難な状況にある。なぜなら彼らは世界史上まれにみる血なまぐさい内部テロの十数年を過ごし、ずっと以前からの、恐るべき、時には血ぬられたネガティブ・セレクション〔悪い奴ほどえらくなる〕を経てきており、刑法上の弾圧はわが国よりも厳しく無慈悲なのだから。

われわれボーランド人は、ロシア人を語るとき、ソ連がツアーリズムのスタイルや野望を継承しているという事実や、それに関連してソ連拡張主義においてロシア民族主義が大きな役割を果たしていることを忘れてはならない。しかし同時に、ソビエト主義はボーランド人、リトワニア人、ラトビア人、ウクライナ人、グルジア人、アルメニア人たちの民族的アイデンティティを破壊しようとしているとともに、ロシア人の民族的アイデンティティや伝統や文化をも粉砕していることを忘れるべきではない。ソビエト主義はボーランド人にとってと同様、ロシア人にとっても脅威であり、有害無比なのだ。

リトワニア、白ロシア、ウクライナとの関係

われわれの意識の中でリトワニア、白ロシア、ウクライナの諸民族は特別な地位を占めている。再びここで、1975年9月17日のワルシャワ型ヤン教会でのヤン・ジェユ司祭の説教を思い起こしてみるべしだろう。この説教は、私の考えでは、ただ単に道義的な面で歴史的な意味を持つばかりでなく、道義上の原則そのものが問題になった出来事なのだから。それら諸問題は太いきずなによってわれわれと共に運命に結びつけられている。けれどもかれらがその運命の共通性をわれわれほど誇りに思っているかとなると、あまりそうとも言えない。リトワニアとルーシ〔ロシアの古名〕におけるシュラフタ階級エリートたちのボーランド化はそれら民族を「非歴史的」人民の列へ追いやり、かれらが自前の新しいエリート、新しい知識人階級を生み出すようになるのを19世紀後半にまで遡らせる結果を招いたのである。このボーランド化は実のところ自然の趨勢であり、力の行使を伴ったわけではない。しかしそれはまた同時に厳密な意味における民族の誕生を遡らせる災いでもあった。このことは容易に忘れてはもらえない。そのうえ、ウクライナ人たちは17世紀、18世紀のことを、つまり、コサックやウクライナ農民の蜂起をボーランド人が恐ろしく野蛮なやり方で鎮圧した事實をよく覚えている。が、一方でかれらは、1648年〔フェデリク・ツキ率いるコサックの蜂起〕に自分たちが犯したボーランド人やユダヤ人の殺害とフマンの虐殺（1768年）については触れようとしない。ボーランド人はその逆である。第1共和制はあまり良い思い出を残していない。

第2共和制もそれを改めはしなかった。その反対である。ヴィルノ〔現リトワニアの首都ビーリニュス〕をめぐるボーランド・リトワニア紛争は、事実、解決困難であった。双方が共にこの町に感情的な結びつきを持っていた——われわれが記憶にとどめていることはまれであるが、少なくともヴィルノ地方中西部（ヴィルノ市が含まれる）はその人口の大半が民族的にはボーランド人であった。ビウツキが推した連邦国家案による解決法はあまり望む人もいなかつたし、結局はそれもボーランドの民族主義者たちがぶち壊してしまった。今日に至ってもくすぶりづけるリトワニア人のわれわれに対する憎しみはヴィルノが原因なのである。さらに、あの愚かな年〔1919年〕の記憶がそれを煽り立てる。ボーランドの町々の通りを人々が口々に叫びながら進んでゆく「『御者よ、われわれをコヴノヘ！』……まるでボ

ーランド国家の紋章が白い鷲ではなく、のろま山羊でもあるかのように。われわれの方はいまでもリトワニア人に対して、かれらが第2次大戦の時にすんでドイツ軍に協力を申し出、とりわけひどい苦しみをボーランド人に（ユダヤ人にはさらにひどく）与えたことで憎んでいる。こうした誤った堂々めぐりは断ち切らねばならない。最近、コヴノ〔リトワニアの古都、カウナス〕で民族的、宗教的問題を背景にして騒動が起きた時、ボーランド国内では連帶の雰囲気（残念ながら雰囲気だけにとどめたが）が一般的であった。もしかするとそれは良い前兆なのかもしれない。

穏和でもの静かな白ロシア人とは、われわれはいまだかつて、ウクライナとの間で起きたほどの深刻な紛争は経験していない。しかしながら、第2共和制はかれらに対してもボーランド化を推しすすめることで罪の帳尻を合わせた。その結果はおもに白ロシア語教育の衰退として現われてきた。われわれが日ざすべきはこうしたたぐいの現象が2度と起こらないようにすることである。

ウクライナ人の紛争、これが最悪であった。第2共和制になってから最初の戦争は——これに触れる人はあまりいないが——東部ガリツィアでのボーランド・ウクライナ戦争〔1919年〕である。このころのルツフ〔現ウクライナ領〕はボーランドの歴史と文化と共に発展し、人口でもボーランド人がウクライナ人をあきらかに圧倒する町になっていた——当時、このルツフを放棄することなど想像すらできなかつたろう。そこで力による解決がはかられた。悲しむべきことである。もっとも2つの民族が戦争以外に解決の道を知らないという事態は歴史上めずらしいわけでもない。ウクライナ人たちの被害の清算が始まるのはもっとあとになる。ウクライナ民族統一運動（「イレデンツ」）はウクライナのファシスト民族主義者から不斷に刺激を受けていたが（このことを隠すべきではない）、その運動が支持を求めるのは、ある時はドイツであり、ある時は、ボーランドに敵意を持っていたプラハであった。この運動は第2共和制にとってゆゆしき問題であった。しかし、ヴォウイン県〔国境地帯〕知事ユゼフスキは、共和国のためを思ひ、ウクライナの文化精神を支持することで緊張の緩和に成功している。ウクライナ人たちの民族的、文化的欲求の無視はなんの解決ももたらしはしなかった。鎮圧は（事実、おこなわれた）不名誉な事件である。たとえウクライナ民族主義者のテロやサボタージュが困難な状況をつくり出していたとしてもそれはまた別の問題なのだ。もし第2共和制の時期がウクライナ人にとって西部ガリツィアと

ヴォウインで、ルツフのウクライナ人大学のようにウクライナ文化の諸制度が共和国の庇護のもとで花開いた時期として記憶されていたらならば、両民族の将来はより良いものになったであろう。その成果は双方にとって、今日に至っても、またこれから将来にかけても、利益が大きかったであろうに。事実はそうならなかつたのである。

第2世界大戦は罪の勘定書を不均等に担わせた。それを双方が互いになじり合っている。今回はわれわれの方から非難すべきことはあまりない。一方、戦後すぐ（1945年）、ウクライナ蜂起軍（UPA）がソ連軍に敗北してボーランド保護領の中西部地区に追いやりられ、ビエシュチャディ地方で戦陣を起こした時、このウクライナ・バルチザンが提起した問題の解決策として共和国側が考え出した方法——この地方と無人の荒野との交換、すなわち、ウェムク人〔この地方に住むロシア人〕を強制移住させボーランド各地（プロツワフ、シチェン、オルシュティン、コシャリン）に離散させる——は懸魔的思いつきであった。それが生まれたのはKGB「顧問団」のうち誰かの頭のなかであつたろう。KGB「顧問団」は「分割して統治せよ」というローマ帝国の原則を実践する才能に恵まれ、また、白国の先例（規模はこの数倍にのぼる）をよく知っていた。

チェコとの関係、そして反ユダヤ主義

チェコとの関係についても少々ふれてみたい。もっとも、すでに述べたことのあるが、チェコ人がわれわれに対して清らかな良心のみを持つと言える根拠はいさきかもない。ザオルジヤンスキ・シロニスク地方〔現チェコ領〕問題の武力による一方的解決は、1920年にボーランド国境が宙に浮いていた時に行われたので、これはチェコにとって名誉なことではあるまい。と言え、ボーランドがヒトラーのチェコ分割に加担したのはやはり恥ずべき行為である。1968年、つまりその30年後、ボーランド軍はチェコの占領に加わった。68年以来、反体制の若者らによって今日まで歌いつがれている美しい歌「フラデツ・クラローヴェ」〔チェコのボーランド国境近くの町〕の最終フレーズには正当にもこうある——「軍靴の響きはきみの命令ではない、しかしやったのはきみだ、フラデツ・クラローヴェをこうしたのはきみだ」——ボーランドの国民は、外国によつて与えられ、おもに外国の武力によつて支えられている政府に責任は持てない、だが事実は事実として残る。「われらの自由はきみらの自由」——この美しい

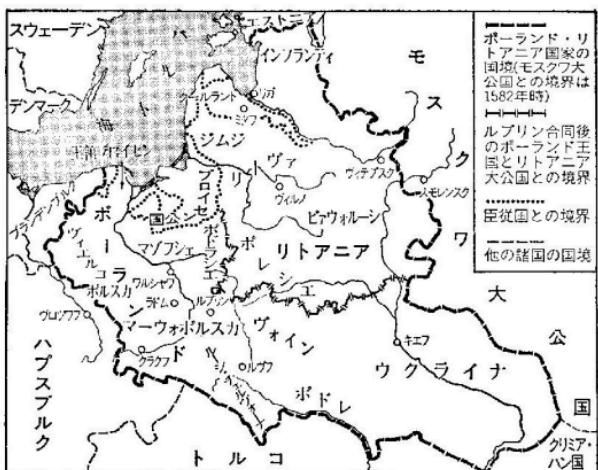
伝統を持つ偉大な国での行為は残る。抗議の声は、イエジ・アンジェイエフスキとズィグムント・ムイチエルスキのチェコ・スロヴァキアの兄弟たちに宛てた書簡、そして、ワルシャワの大学生の小グループによる抗議ビラ配布の試みだけであった。怖れてばかりいたわれわれには誇るべき何ものもない。さらに悪いことに、この侵略を正当と認め、ドイツの脅威だの、チェコのわれわれに対する敵対性だと考えもなしに馬鹿げたことを言いふらす人物に出会うことがある。民族的誇大妄想と外国嫌いは、まさしく、いまこの時われわれにとってとりわけ近しい人々、ステティ山脈の向こう、オルセ河の向こう、カルパチア山脈の向こう側の人々に対して向けられたのである。われわれは連帯感の欠如した狭量さを示したのだ。

今日、ポーランド人のすべてが理解すべきである——正しさには2つあると、道徳的正しさと政治的正しさの2つが。わが國をとりまく諸国民に対する伝統的な嫌悪感と誇大妄想は、今日では自殺行為である。道徳的正しさについて言えば、われわれがすでにソビエト主義にかなり毒されていて、われわれの過去と西側の文化、キリスト教倫理の伝統へのきずなを奪われかけているという状況は、すでに以前からわれわれの歴史、われわれの民族的・精神構造における汚点であり（ほかの諸民族にも似たような点が認められるが）、今日では死と腐敗の先触れになるのかもしれない。政治的正しさがわれわれに説くのはテーゼの尊重である。そのテーゼに従えばわれわれは、死と腐敗の脅威から、ソ連国民とソ連に従属している国民とともに一齊に解

放されるか、あるいはひとりたりとも解放されないか、どちらかだ。ソ連の体制に組み込まれた諸国民を縛りつけている全体主義的なソビエト主義が爪の中の獲物（今日のわれわれの状態）を離すよう強いられる可能性はほとんどない。

反ユダヤ主義は外国嫌いの一種であり、歴史において特異な機能、役割を担っている。ゆえに、とくに取り上げて語る必要がある。

まずははじめに、はたしてこれは「外国嫌い」であるのかという疑問がある。もしすべての面で（言語、民族感情、宗教、伝統、慣習、衣服など）他と異なる人々がポーランド国内に生活していて、その人々に反ユダヤ主義の矛先が向けられているのならば、なるほどそれは外国嫌いと言えよう。しかし、もし言語も衣服も変わらず、先祖の宗教からも縁の切れている人々が反ユダヤ主義の的となっているのならば、それはかれらの、現実の、あるいは想像上の「向こう側」との連帯感が原因と考えられる。それもまた外国嫌いと言ってもよかろう。しかし、よくあることだが、反ユダヤ主義の対象が、ポーランド化した（公式にではなく事实上ポーランド人の大部分と同じ宗教を信奉し、骨の髓までポーランド文化が浸み込んだ）世代に属する人々、さらには、これもしばしばあることだが、ポーランドの独立と自由のために戦いつづけている人々にまで広げられるとすれば、それはもはやただの外国嫌いと言えない、何かもっと大きな、不吉なものである。外国嫌いとは有害であり、けっして望ましいものではないが、必ずしも社会精神病理学の対象になるわけで



16世紀後半のポーランド

はない。

こうした反ユダヤ主義の唯一可能な定義は人種的偏見である。それはしばしば意識下にあり、あからさまに口にされることはない。生物学的、人種的な観点から、ある人間の方がより小さく、より不完全な価値を持つという信念は、しかし、われわれのキリスト教倫理の遺産とも、また隣人愛の教えとも、パウロの教え「ユダヤ人とギリシャ人の差別はない」〔ロマ書10・12〕とも折り合いがつかない。

われわれはほかにも、宗教的な、だが似非キリスト教的な正当化の試みを知っている。ユダヤ人たちによるイエス=キリストの拒否が（また、ユダヤ人たちの迫害のもとで流されたキリストの血を受けた者たちによるキリストの受け入れさえも）、人類の原罪に類似した効果をひき起こした、つまり、かれらは内在的悪をわが身に引き受けたのだという考え方方がそれである。この思考構造は神学的というよりはむしろペリシテビト的であり、典型的なアンチ・キリスト教である。キリスト教はある特定集団に固有な罪など認めていないし、その罪の相続も、また罪に対する集団の連帯責任も認めない。キリスト教神学における原罪とは罪を相続することではなく、人間の本性のみにくさなのである。そこで、この考えに照らして考えてみれば、ユダヤ人は倍もみにくい本性を持っていることになる？ そうであれば、隣人である罪びとは特別な配慮の対象にこそなれ、迫害を受けるいわれはない。いずれにせよ、そのけがれも洗礼によって洗い流されるのだ。このような考え方方はがちがちの国民党〔ND、1897年結成の反社会主義、反ユダヤ主義団体〕や1934年結成のファシスト団体ONRの受け入れるところではなかった。しかし、こうした見解が（慎重に取り扱われていたとは言え、事実上）支配的であった寛容の時代に、反ユダヤ主義にもとづくこの異端も第2回バチカン公会議〔1962～65年〕によって退けられた。そのこと自体は良いとしても、これほど遅れたのは残念である。キリスト教倫理の真の中味とは（信者にとっても、信者でない人にとっても同様に）、人間の価値はその人の行ないによって決まる。それゆえにすべての人間は平等である（信者であればこれに「神の前に」と付け加えるだろう）、行ないに対してのいかなる評価も「汝の隣人を愛せ」という命題にそむくことはできない——こうした意識である。

ポーランド国民は長年にわたりキリスト教徒であった、にもかかわらず反ユダヤ主義は根づいてしまい、不安を呼び起す手段に用いられている。

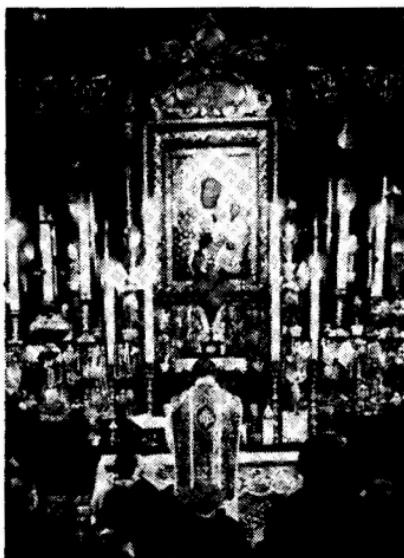
反ユダヤ主義——あるいはそれはひとつではなく、

さまざまな反ユダヤ主義があるのだろうか？ われわれはこの現象の規模が広いことをよく知っている——優越感と侮蔑感に始まり（その最もグロテスクな形態が「外国嫌い」である——それは全知全能の純粋に精神的な唯一神を明るみに出した、あるいは見い出した民、かくも多くの、おそらく他の民族とはくらべものにならないほどの比率で偉大な学者、芸術家、作家を輩出した民、何千年にもわたるきわめて困難な状況のもとでみずから宗教、文化、アイデンティティを保ち続ける不屈の精神を現わした民に向けられるのだ）、危機感が生まれ、そこからさまざまな種類の差別が出てくる。そしてついには大衆の口から発せられる憎しみの声に変わる。これらの現象をすべてひっくりめて同じものと言うことはできない。違いは大きい、だがそれにもかかわらず、反ユダヤ主義のより穏やかで、「心やさしい」形態が、最も恐ろしい形態の極になると指摘は正しい。また、これらすべては、同一程度でないことは事実だ——隣人愛の教えにそむくものである。

何世紀にもわたるポーランドの歴史はこの面においてヨーロッパの中で最もすばらしい（他の諸国との比較で）ものに属する。騒動やそのほか胸の悪くなる現象は共和国においても起きたが、中世の西ヨーロッパであったような恐ろしいボグロムに至るほどの事件は起きていない。賢明な王たちや支配エリートたちには共和国内に住む諸民族の共存を分別を持って能とする能力があった。バヴェウ・ヤシェニツァはその著、『ヤギエウォ時代のポーランド』において正当な誇りをもってユゼフ・ヴィチ兄弟を挙げている。改宗ユダヤ人（先祖はユゼフ・ヴィチ＝フレブニツキ家）であった兄は「2国民の共和国」〔ポーランドとリトワニアの合同体〕の高官になり、弟の方はモーゼ派〔ユダヤ教〕にとどまつたまま、ズィグムント・スタルイ〔リトワニア公国の人王、在位1506～1548〕によって騎士の位を授けられた。「黄金の世紀」〔16世紀〕においてはいまだそうしたすべてが可能であった——騎士の位にあるユダヤ人、時代の先頭に立つ詩人である農民、知識エリート（さらには政治エリートでさえも）である商人。

のちに、国家と国民が没落したにもかかわらず、19世紀後半には「近代的」反ユダヤ主義が登場してきた（「近代的」とはつまり、諸国家の境界を越えることを

いたとえ宗教的憎悪を持っていても、みずからに肯じえないシュラフタ気質から脱け出した、という意）。当時は、独立を求める戦いの時期にはまだ、コシチュショフ蜂起軍とドンプロフスキ軍團で士官を務



め、1809年、コツェク近郊の戦いで倒れたペレク・ヨセレヴィチ [1794年のコシチュシュコ蜂起ではユダヤ人騎馬連隊を編成し、1807年にはワルシャワ公国軍で戦い、1809年、コツェク近郊においてオーストリア軍との戦闘で戦死] の名に代表される伝説があった（1794年のプラハ防衛で血を流した彼の連隊の兵士たちについてではあまり知られていない）。また、彼と同じくリトワニア出身で同じ年のヤンキュル（ミツキエヴィチ『パン・タデウシュ』のモデル）もそうである。ほかにもロシアの占領に対する戦いでカトリックの聖職者たちと連帯してシナゴーグにポーランド語を持ち込んだメイセルスとツイルクフの伝統、1861年、クラコフスキ・ブシェドミエシチエ〔ワルシャワ市内の通りの名〕のデモ行進の伝統・行進の先頭を十字架を掲げて進んでいた修道士が一斉射撃で倒れた、するとラビの学校に学んでいた若者ランディがふたたび十字架を頭上にかざした（「ポーランド人の十字架を」と記録にはある）、そして、彼もまた次の一斉射撃に倒れた——また、1月蜂起〔1863年〕におけるユダヤ人土官、兵士たちの伝統もある。これらの伝統はつねにポーランドの反ユダヤ主義を（不完全にではあっても）押しとどめるものであった。またそれは、分割時代におけるポーランドの文化と科学、教育のために戦ったユダヤ系ポーランド人たちの熱烈な愛国主義の伝統によって強められ、のちのドンブロフスキ軍団へのユダヤ人たちの参加によっても再び強められた。ボレスワフ・ブルスがその後の過程を見事に捉えている——新しい世紀がはじまり、王国を工業化の波が襲い出したころ、1863年に連帯を示した人々のその後の道はちりぢりに別れ、ユダヤ人は「ポーランドらしさ」から突き離されゆく。ポーランド文化の中に育ったシューマン博士にとってそれは不幸な事件となり、こうした流れに適応できなかったシラングバウムにとってそれは自分をよそ者と感じる契機となった。この2人は（ウォクルスキと同じように）1868年の蜂起の参加者であった。このことをわれわれはしっかりと記憶にとどめておこう。

反ユダヤ主義の雰囲気は、ポーランドの小市民層の間にますます奥深く根を下ろしてゆき、ツァーの帝国とポーランド王国でロシア秘密警察の挑発によってさらに煽り立てられた（今日ではすでに、1905年に頻発した数々のボグロムに誰が火をつけたのか、そして、「ション賢人会報告」を誰が公表したのか、についてはおよそのところ知られている）。こうした反ユダヤ主義の雰囲気は国民党のイデオロギーと行動に入り込み、徐々に先鋭さを増し、ますますあからさま

にハメをはずしてゆく——経済的ボイコットのスローガンに始まり、少数民族としてのユダヤ人の市民権に疑問の声をあげ、ついには街頭や大学での流血のボグロムに至る、あるいは、国民同盟〔LN、民族主義者のドモフスキが率いるポーランド同盟LPが1893年に改組された組織〕にはじまり、国民民主派〔 SND、1897年、国民同盟LNの1セクトとして登場、反ユダヤ主義をスローガンにする〕、大ポーランド派〔OWP、全民族主義者の統合と反サナツィア体制を目的に1926年に結成されたファシスト団体〕、ついには民族急進派〔ONR〕と国民民主青年会の結成に至る。民族急進派の新聞にはポーランドに住むユダヤ人を絶滅せよと要求する声まで現れるようになった。

残念ながら、こうした動きに対する社会の側からの抵抗は弱すぎた。最も勢力の強い左翼政党ポーランド社会党〔PPS〕の力は労働者の間では強かったものの、学生の間では弱かった。この弱い部分から民族急進派の闘士が募られたのである。左翼、および自由派の知識人たちは民族急進派による犠牲者たちに連帯する意志を表わした、しかしそれはおもに個人的勇気の表明にとどまった（ここで興味を惹くのは、こうした行動は古くから国民党に属していた大学教授たちの間に多く見られたという事実である）。ピウスツキの死後、政府はますます右翼ファシズムへの傾斜を強めていった。そしてサナツィア体制〔ピウスツキ統治下の体制〕に対立する位置にあるグループの一部と、

政府と同盟関係にあるグループ（民族急進派「ファラング」）によって起こされた暴動の鎮圧にはそれほど熱心でなかった。教会も傍観していた（例外は、改宗ユダヤ人神父パルが教会内で暴行を受けたような、きわめて露骨な事件に限られていた）、また、カトリック系新聞の一部（たとえば『マウイ・ジエンニク』）までが反ユダヤ主義を支持した。

こうした状況の中で戦争と占領が、そして占領者によるユダヤ人絶滅が始まった。こうした状況のもとでボーランド人が受けた試験に対する評価は、残念ながら、単純明解とはなりえない。

西側の、おもに何百万人もの虐殺という悲劇に見舞われたユダヤ人社会には、ボーランド国民が虐殺に加担したという、無責任で現実とはほとんど何ひとつ共通するものはない非難が現われた。さらには、ボーランド人を指して「ゆすり屋」〔シムルツォヴィニク、ナチ占領当時、身を隠しているユダヤ人を密告すると脅して金をまき上げた〕というような、侮蔑的定義さえ現われた。反ボーランド主義は反ユダヤ主義に比べて侮蔑の度合が少ないというわけではない。「ボーランド人はすべて反ユダヤ主義者」あるいは「ボーランド人はすべて酔っぱらい」——こうした言辞は「ユダヤ人はすべてサギ師」というのと五十歩百歩である。

いわゆる「ゆすり屋」の現象、つまり、身を隠していたユダヤ人にに対するゆすり、および、ユダヤ人絶滅作戦におけるゲシュタポへの協力によってボーランド人は西側と多くのユダヤ人たちから非難を受けた。しかしそれは、ボーランド人全体からすればほんのわずかな人間たちの行為であった。いかなる社会にも悪人ははある程度いる。しかしユダヤ人にとってはそのわずかな数の人間たちが他のボーランド人全体を覆いかくすものであった。そうした比率のゆがんだ見方の責任を、長年にわたって「狩り出し」の被害者であった人々に負わせることはできない。ただゲシュタポがなぜあれほどのことときたやすくできたのかについては記憶しておくべきである。身を隠していたユダヤ人の「狩

り出し」だけではなく、地下軍隊の活動をそっくり知られてしまったり（たとえば、国内軍AK「オサ・コサ」の擾乱活動本部の壊滅）や、AK本部司令官「グロト」、ロヴェツキの行動までが筒抜けになってしまったのは、この少数の裏切り者たちの協力の結果なのである。したがって、原則としては反ユダヤ主義が問題だったのでなく、ゲシュタポが追跡していたすべての人々を対象にしたいかがわしい取引きこそが問題なのである。

ユダヤ人に対するボーランド社会の態度について、ゆがめられた見方に異をとなえたのは（まったくの善意からとも思えないが）ボーランド労働者党〔PRL〕のプロパガンダであった。反ユダヤ主義傾向について世界中のユダヤ人一般は、それを悪意ある情報が広まるのを防ぐためにしている者たちのつくうそであると考えている——ボーランド労働者党はそう一般化した。イスラエルの「国際正義」メダルを授与されたボーランド人は数多い（これからもさらに増えるだろう）。これは、イスラエルのユダヤ人たちが第2次大戦中のボーランド人によるユダヤ人救援活動を高く評価していることを物語る。さらに、最近このメダルが地下戦闘組織の元司令官に授与された時、ヤド・ヴァシェム研究所はその決定の根拠としてボーランド地下国家の功績を公式に指摘した。フリップ・フリードマンをはじめとするユダヤ人学者たちはボーランド人によるユダヤ人救援活動の研究に重要な役割を担っている。西側のユダヤ人の一部に反ボーランド主義をユダヤ人全体の責任にするわけにはゆかない、と同時に、反ユダヤ主義をボーランド国民全体の責任にしてはならない。

しかしながら、痛みを持って、だが大膽にこう言うべきである——この問題についての真実はこれまでいく度となく言られてきたほどには単純でも明解でもないと。身を隠したユダヤ人に対して罪を負うべきものはもっぱらボーランド人である、ただしそれは迫害と狩り出しという行為ゆえにでない（たしかにわれわれの中にはそうした悪事を働いた者もいるが）、そうではなく、目の前で行われた犯罪に対する無関心ゆえにである。もちろん、ユダヤ人を助けるには英雄的な勇気が必要だった。戦闘でドイツ軍に捕われ、しかし強制収容所を無事に生きのびた人々を私は知っている。だが、ユダヤ人をかくまい無事に生きのびた人間は1人も知らないし、そんな話を聞いたことがない。そのうえ、AKの兵士ならば、自分が捕われた時に待ち受けているのは拷問であり、あるいは妻の逮捕であり、彼自身はきっとじきに銃殺されるだろうとは知っている。

ボーランド最大の詩人
ミツキエヴィチ



たが、幼い子供が生き残れるという期待は持てた。しかしユダヤ人をかくまつた者はそうした期待さえ持ちえなかつた。このような犠牲をフランス人やオランダ人は払わずに済んだ。にもかかわらず、かれらのユダヤ人救援活動の功績はそれほどめざましいものとは思われない、むしろフランス人がユダヤ人を引き渡した罪の方が重大である。ユダヤ人救援活動にボーランド社会が払つた努力は大きく、尊敬に値する。ボーランド人は大量の血でそれを譲つたのである。しかし成功はしなかつた。友人たちを（時には、偶然に出会つた他人を）救おうとした個人や家族を中心にして「ユダヤ人救援会議」のような組織が活動した。それらの組織はボーランド地下国家の支持と援助を利用した。この問題に関してボーランド政府は決然としていた。それでも私は、ユダヤ人絶滅に対してボーランド社会の大部分が無関心であったと思う。その原因は戦前に猛威をふるつた反ユダヤ主義にある。極右の新聞は、なんと戦中においても相変わらず反ユダヤ主義的であったのだ。こんな文句さえ聞いたことがある——「戦争が終わつたらヒトラーの銃像が立てられるだろう」。もしボーランド国民が戦前の反ユダヤ主義に毒されていなかつたら、無関心の度合いもおそらくこれほどひどくなかつたろう。同様に、マゾンヌ地方の町々でゲットーから移送されてゆく人々、われわれの同胞市民に対して行われた略奪、乱暴狼藉（これららの行為についてAKの機関紙『ビュレティン・インフォルマツィイ』はあけすけに書き、抗議し、行いを改めなければ弾圧するとおどしていた）といつたいかがわしいことも起こらずに済んだろう。

ボーランドにおける反ユダヤ主義の歴史はこれで終わるわけではない。戦後すぐ、キエルツェのポゴロムのニュースが国中に衝撃を与えた。多くの証拠が、このポゴロムがNKWD〔ソ連の内務人民委員部〕と保安部の挑発の結果であったことを示している。ボーランドは基本的にはヒトラー化された国であり、そこでは共産主義者だけが秩序を保てる——このように西側の世論をしむける必要があつたのだ。もっとも、このことを100パーセント証明できるものをわれわれが持つてゐるわけではない。たとえそれが見つかったとしても、こうしたたぐいの挑発が成功するには、ただ、それが実を結ぶ土壤があり、それを受け入れる下地がすでにできている場合に限られるという事実は残る。

スターリン支配の歳月は反ユダヤ主義をさらに刺激した。予想されたことでもあった。なぜなら、戦前、自己の領土を持たない少数民族はさまざまな差別に苦しんでいたのが通例であり、極端なインターナショナ

リスト左翼はユダヤ人の若者や知識人の間で一般的であった。したがつて、新しい政府、とりわけ弾圧機関（はっきり名指しそれば「保安部」）には少なからぬユダヤ人とユダヤ系ボーランド人が見られた。この現象がモスクワ中央に源を持つマキャベリズムと軌を一にするのかどうかはわからない。少数民族はみずからを持つ排他性ゆえにこうした役割にうまく適応した（AK〔ソ連の反革命・サボタージュおよび投機取締非常委員会、1918～20年〕におけるボーランド人、ユダヤ人、ラトビア人の血にまみれた役割を想起せよ）。また一方で、贖罪の羊山の役割にもうまく適応したのである。

この現象、つまり、ボーランドで生き残つたユダヤ人とユダヤ系ボーランド人たちのかなりの部分が保安部へ、また共産党政権のありとあらゆる機関へ加入したという現象は、東部国境地帯に住むユダヤ人の大部分が歓呼の声で（短期間であったが）共和国の崩壊と占領を迎えた、あの1939年〔ドイツのボーランド侵攻〕の記憶を思い起させた。しかしながらこのことだけを思い出すべきではない。たとえば、アルターやエーリッヒといったブント〔ユダヤ社会主義労働者党、1897年リトワニアのヴィルノで結成〕の指導者たちの共和国に対する英雄的な忠誠心、そして、かれらのソ連政権に向けた抗議の声もまた思い出すべきである。かれらはその代價をまもなくみずから命で支払うことになった——それゆえに、ボーランドの追憶の殿堂にかれらは入れなかつたのである。

しかし、1956年10月が明らかにしたのは、反ユダヤ主義に走らせる動機はごくたまに暴力事件を惹き起こしたし今日に至つてもくすぶりづけてはいるものの社会が自発的にぶっそうな行動を起こすほどには強くない、ということであった。だが数年後、その動機を政争に利用しようとする試みが組織的に行われた。ミエチスワフ・モチャル指導下で権力をめざしていたグループは、はじめのうちは半公然と、1967年には公然と、そして、1968年には鎧と太鼓で反ユダヤ主義のスローガンを叫びたてた。もっとも、それは単にプロパガンダの決まり文句を寄せ集めたにすぎず、イデオロギーと呼ぶには恥ずかしいほどであったが。そのために利用された手段というのは、民族的誇大妄想を鼓舞する「愛國主義」（「ぼくらボーランド人は黄金の鳥」などというものが子供のあそび歌に現われた）、民族神話の無批判な撰取と我田引水、闘争精神高揚の呼びかけ、軍国主義のたくましい空想、正義を押圧する行動の賞揚、西側とのきずなとキュスロヴァキアへの連帯感情に狙いを定めた「外国嫌い」のすすめ、であつ

た。ある程度の成功はおさめた、しかし、正確には反ユダヤ主義キャンペーンが成功したわけではない。これ以上に社会を刺激することには不安があったのだ。なぜなら、社会の予想以上にかなりの部分が、のろのろと慎重に、不承不承、おまけに敵意をこめて反応したのだから。以上の指示によるキャンペーンという事実そのものがたいした成功を約束していなかった。現実には党的各機関と党アクト（あとはPAX〔カトリック系の御用政治団体〕のような民族急進派ONRの伝統に忠実な翼賛組織）だけしかこの問題には関心を示さなかった。もっとも、関心とは言ても、戦前のポーランド小市民が自分の競争相手としてユダヤ人を憎んでいたという程度のものにすぎないのだが。ここで小市民にとって代わったのが、「椅子」をめぐる競争でライバルとなったユダヤ人を憎んでいた（1968年にはまだそのような状況があった）狭量な党员たちだった。なかでも若い下部党员たちは特別に熱意をもって反ユダヤ主義を受け入れた。

1968年、何千人のユダヤ人とユダヤ系ポーランド人が国外へ追いやられた——この事件はわが国歴史上の汚点のひとつである。当時ソ連に吹き荒れていたソビエト警察の反ユダヤ主義（これについてポーランド共和国内ではいまだ何ひとつ公表されたことがないが、ソ連国内のユダヤ知識人の大部分が息の根を止められ、イディッシュ語を使う作家は根だらしにされた）、それがわが国に移植されたのだった。その数ヶ月後に「三月事件」の先頭に立った党的専門評論家たちがポーランド＝ソ連友好功労賞を授けられたのはそれなりの理由があったのである。かれらが、そしてかれらと同體を結んだ党が惹き起こした道徳感の喪失、具体的な損失をもう一度かぞえなおしてみるべきである。精神的に耐えきれずにポーランドを脱出した人々のなかにはかけがえのない専門家が多数いたのである。

1968年にユダヤ人迫害をくわだてた「三月評論家」や党機関員たちと私とが同じ祖国を持っているとはとうてい思えない。自分たちの過去をかくもけがらわしい行為のために利用したZBOWID〔「自由と民主主義を求める戦士の同盟」、占領期に地下闘争を戦った兵士たちが集まり1949年に設立した団体〕の兵士たちは恥ずべきである。かれらの中には、残念ながら、国内軍AKでさまざまな地位にあった私の戦友たちもいる。

メシアニズム、「ポーランドらしさ」、カトリック

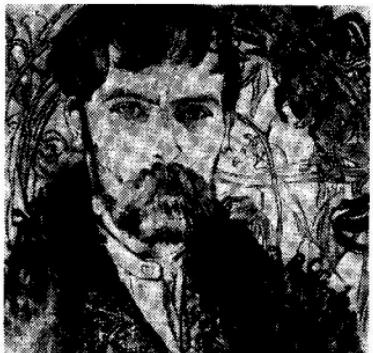
「外国嫌い」のさまざまな変種には民族的誇大妄想

がついて回る——「ぼくらポーランド人は黄金の鳥」、われわれは比較を絶して良い資質を持ち、賢明で才能に恵まれている、世界のどの民族よりも、とりわけ、われわれのすぐそばに住む民族などとは比べものにならない……。17世紀初頭、デンボウエンツキ神父がすでにこのてのわざとの山を開いているが、それがそのまま現在もつづき、成長を遂げているのである。

11月蜂起〔1830年〕が敗北に終わったあとでの希望のない國際情勢のなかで、ポーランドのメシアニズムは花開いた。わが國最大の詩人、思想家たちがこの理念に身を捧げた。この理念の真の偉大さはかれらの才によって羽翼を与えられた。後世にどのような影響を与えたのかについては疑問が残るもの、このメシアニズムが、敗北感の中で生きのびるためになんらかの役割は果したのであろう。しかしその遺産となるとみじめなものである。つまり、このロマン主義的な飛翔によってどうにかこうにか形を成したポーランド人の平均的精神構造とは——ただ自分がポーランド人であるというだけで何か特別に優越しているかのように感じ、そしてその優越感を宗教的熱狂によってしばしば正当化するというものである。もっともこの熱狂という言葉は大げさすぎるかもしれない、むしろそれは民族的・宗教的小道具に生きがいを求める熱狂のカリカチュアにすぎまい。

民族と宗教の入り組んだ関係には注意を向ける価値があるし、またぜひとも向けるべきである（党-ZBOWIDの愛国的お国自慢が社会にそれほど影響を及ぼさなかったという点はその良い側面である）。「ポーランド人であり、かつ、カトリック教徒」とは何を意味するのだろう？ これについてはボフダン・ツィヴィキンスキが『不屈の人々の系譜』で日記りのゆき届いた、権威ある、的を射た文章を書いているが、ここで私はその問題についてのいくつかの見方を挙げてみたい。それは「愛国主義——だが、いかなる？」という疑問に答える際にこれらの見方が基本的な意味を持つからである。

「ポーランドらしさ」とカトリシズムの不可分性についてのスローガン—断言にはさまざまな解釈が成り立つ。そうしたスローガンはたいてい正確さなど考えもせぬ呼ばれる——あまりにしばしば同じようにして繰り返されるので、そのやり口が簡単に見てとれるほどである。スローガンがよく押しつけるのは、どういう人間がカトリックではないか、また、どういう人間がかけがえのない、完全なポーランド人か（そもそも厳密な意味でのそうしたポーランド人が存在しているとすればの話だが）という解釈である。しかし、



劇作家・画家 ヴィスピヤンスキ自画像

もしそういう言葉を誰かにあてはめようとするのであれば、いずれにせよ、その言葉がいったい何を表現しているのかをまずははじめにはっきりと示すべきであろう。最近、「ポーランドらしさ」とカトリックの不可分性についてグダンスクの『プラトニヤク』に載ったスロカ神父の論文を読む機会があった。著者は——私の個人的解釈であるが——誤解、つまり、カトリックがポーランドの文化にあまりに大きく多面的な影響を与える、あまりに深く食い込みすぎているためにこの国の文化全体を分裂させない限りカトリックとは別れられなくなっている、という誤解に答えようとしている。妥当な問題の立て方であり、誰を傷つけるものでもない。もっとも議論の余地はある、たとえば、ロシア正教がいかに強力にロシア文化を決定づけたかを知る人は次のように尋ねることもできる——もしロシアで宗教の復活が不意にビヨートルの都〔ペテルブルグ〕と結びついで起きたとしたら、ロシア民族に重大な変化が起ころどろか、民族としての一体性そのものが失われてしまったのではなかろうか。さらに——一般論として——どこかの非キリスト教国の国民がカトリックになることはその国民の民族性喪失の原因にならないだろうか。しかし、この議論は脇に置くとして私がより問題にするのは、前に掲げた、ポーランド＝カトリックというスローガンの解釈である。私の考えでは、このスローガンはわれわれが「外国嫌い」と「民族的誇大妄想」に出会うところどこにでも現われる。それはまた、ここで考察の対象とした、厳密さを欠いた文章の中にも見てとれる。

先に挙げたスローガンはうそであるばかりか、民族の伝統に、そして今日の民族感情に良くない作用を及ぼしている。なぜなら、それは民族的伝統から巨大で

重要な部分を切り捨て、現在も民族固有の生活様式を持っていてもカトリックとしての自觉はない人々をも、これまた切り捨てる事になるからである。

ポーランドの歴史と伝統において非カトリックとは何を意味するのか。わが国の歴史の流れにあまり影響を及ぼすことのなかったエピソード、たとえばポーランドのフス派について考えてみよう。ポーランドの宗教改革とプロテstantの伝統から始める。16世紀、17世紀におけるこれらの伝統は小さなものではない。ミコワイ・レイとアーリア系ポーランド人たちの伝統、ワルシャワ連盟文書〔1573年のヘンリク条項〕に定められた寛容の精神のうちにさまざまな宗派が共存するという伝統もある。われわれの国民的英雄の中にはプロテstantもいるし（たとえばソヴィンスキ將軍）、ポーランド民族運動活動家の中にはプロテstantの牧師も少なくない。カトリック教会が「ポーランドらしさ」を維持するために（とりわけプロイセン占領下と遠い国境地帯におけるロシア占領下において）大きな役割を果したというのはたしかにその通りである。しかし、チェシンスキ・シロンスク地方とマズール地方で「ポーランドらしさ」をはぐくんだのはプロテstantの牧師たちだった。ポーランド・プロテstantの最後の英雄的行動は、ヒトラー占領下における不屈の牧師や活動家たちの殉教であった。ブルシェという名前はプロテstantのシンボルになっている。だがそれは彼ひとりではないのだ。プロテstantの、ポーランド文化と民族の存亡をかけた戦いへの貢献はきわめて大きく、たとえそれをポーランド民族の共同体からしめ出そうと図っても激しい抵抗に出会うだろう。

同様に、否定すべくもないのは、啓蒙期〔17世紀末から19世紀初頭〕以来の、また、実証主義期〔1863年の1月蜂起のあと〕のとりわけ厳しい時代に、ポーランド文化に生き生きとした豊かな実りをもたらしてくれた世俗の無宗派（時には無神論者や不可知論者もいた）の貢献である。ボフダン・ツィヴィンスキ『不屈の人々の系譜』の主人公たち、そして後継者たちのほとんどがこれらの人々である。エドヴァルド・アラモフスキ、ダヴィド夫妻、ヴァソワフ・ナウコフスキ、イグナツィ・レドリンスキ、ステファン・ジェロムスキ、アンジェイ・ストルグ、ステファン・チャルノフスキ、タデウシュ・コタルビンスキ、エドヴァルド・リビンスキ、マリア・オッソフスキとスタニスワフ・オッソフスキ夫妻、アントニ・スウォニムスキ、マリア・ドンブロフスカ、レシェク・コワコフスキ——これらの人々なしには最近100年間のポーランドは想像することさえできない。これらの名前は、ポーランド

思想界の全学派、全潮流を、そして、ポーランドの文化に偉大な不朽の貢献をした何百何千ものポーランド人を代表する人々なのである。

敵対よりも共存を

「外国嫌い」の一変種として、世界から（おもに西側から）入り込んできた「流行」に対抗する「自分らしさ」礼賛がある。この考え方の奇妙さは、おもに、支持者たちがたいてい、西側文化と自分たちのつながりについても同時に命題を提出するという点にある。絶縁しなければならないつながりとは、これまた奇妙なつながりである。この考え方の信奉者たちは、つながりはつながりとしても良い物はもう十分、そう思っているらしい。

滑稽で馬鹿馬鹿しい考え方だ。いまだかつて善だけを持ち隔離された文化など出たことはない。われわれはチェコの兄弟たちからキリスト教を伝えられた。しかしそれは、チェコ人、ドイツ人、そのほか西側の人々、と次々に新しい血を注がれてきたものなのだ。ポーランド人はパリへ、プラハへ、イタリアやドイツの大学へと留学を始めた。最初は細々とした流れであったが、わが国の文化を思う心が流れをしだいに大きくなった。西側の助言者たち、ドイツ人、フランス人たちはロマネスク様式の建築を、また、のちには、ドイツ芸術の色濃い彫刻や彫像をふんだんに使ったゴチック様式の建築をわれわれに教えてくれた。西ヨーロッパ騎士道の慣習はポーランドでも受け入れられた。西側から導入された修道会は文明と文化を広く普及させた。15世紀のはじめ、われわれはルネサンス期のイタリアから、のちには、ルネサンス期にあった西ヨーロッパのすべての国々から芸術家や作家、学者を招いては文化を好きなだけ吸収した。ポーランドのエリートはすべて西ヨーロッパの大学、おもにイタリアとドイツで学んでいる。ドイツから宗教改革がやって来た。それはポーランドの思想を豊かにした。近東のトルコ・タールからポーランドのシュラフタは、服装、インテリア、武器（それに遺憾ながら、杭打ちの刑という野蛮な風習も）取り入れた。16世紀以降のポーランド文学は、イタリア、ドイツ、フランス、スペインなどから流れ込む刺激に窓を広く開けていた。ようやく、18世紀がこれらのきずなを弱め、文化輸入の衰退をもたらした。それはポーランドにとって悲劇的な結果を生んだ。しかし、さいわいにも、18世紀中頃、きずなは再び強まり、ポーランドの芸術家はふたたびイタリアへ学びに出かけはじめ、賢明な一部の貴族たちは、燕

尾服やかつらを求めてではなく、啓蒙思想を求めてイタリアへ旅立った。それが、国民教育委員会と大セイム〔国会〕の改革となって実を結んだのである。それ以来、われわれはいつでも好きなだけ文化をつかみ取っている。ロマン主義、実証主義、シンボリズム、印象主義、表現主義、未来主義……なんでも西側からやってくるのだから。

こうしたことは誰でも知っているし、自明の事実である。だが、繰り返し言っておかなければならぬ。ポーランドの文化が花開いたのは常にこれらの刺激との共存の中であり、敵対関係の中ではないのだと。16世紀ほどふんだんに好きなだけ文化を享受できた時代はない。それは民族文化にとってとびぬけてすばらしい成果をおさめた世紀である。たとえばミツキエヴィチはまさしく西欧式ロマン主義者であったと同時に、独創的なまれに見る創作者でもあった、などなど。こうした他国とのきずなが絶たれた時、われわれが追い込まれる先はせいぜい、サクソニア時代のサルマティズム〔17、18世紀の古代回帰運動〕に似た新サルマティズムであろう。

われわれが与えるよりも、受け取る方がはるかに多かったという事実には痛みを覚えることしばしばである。たしかに、ヨーロッパ文化全体の中では独自の価値の創造という事実そのものも、文化の輸出に劣らず尊重されている、しかしそれわれは、それにもかかわらず、豊かな文化を所有するという事実そのもの以外でもヨーロッパ文化の統合に参加したいと思う。われわれの与える影響は、わずかな例外を除いてそのほとんどが地方的でしかない。ウクライナ人、白ロシア人、リトワニア人は多くのものをわれわれに負っている。しかし、フランス人、イギリス人、ドイツ人、イタリア人にわれわれが影響を与えた例は少ない。それに比べてロシア人は何倍も良い状況にある——かれらにはドストエフスキイがあり、トルstoiがあり、ロシア正教の古い聖像画があり……。だが、民族的誇大妄想なしに考えても、ミツキエヴィチやスウォヴァツキ、ノルヴィドなどを知らないのはヨーロッパにとって大きな損失だろう。一方、ゴンブロヴィチやヴィトカツィはすでに比較的よく知られている。これは、われわれの民族文化の境界を越える機会を持ちうる独創的な芸術の価値が、いまも変わらず、世界からポーランドへ至る道で生まれ、そしてまた世界へと戻ってゆくことを示している。

これまで述べてきた考えはべつに新発見でもない。提出した多くの問題はさらには深く考える必要があろう。

かなり多くの読者にとってこうした考え方には、少なくとも議論の余地があるうし、部分的には受け入れられないと思う。まさしくそれゆえに、ポーランドで「外国嫌い」と民族的誇大妄想（私はこれを必ずしも過激なショービニズムと同義であるとは考えないが）とがいかに蔓延しているかについてのこの素描が生まれたのである。加えて、さまざまな問題を考えるうえでの制限がかなり取り扱われつつある。それは、少しあはリスト教的な考え方方が十全に発展するに不利な歴史的経験のもたらした結果であり、少しあは教育が習慣化された結果でもある。そのため、こうして自分が正しいと思うことを書いている筆者自身、時々、いま書いている考え方をあらゆる点にわたって十分にわがものとしているのか、また、みずから感情的反発をやすやすと制御しているのかと問われた時に、少なくともはっきりそうだとは断言できない思いにとらわれる。しかしそれだけになおさら、私の考え方を普及させる必要性は高い。私は、われわれの現在および将来にとって最も重要な問題のひとつが民族的誇大妄想と外国嫌いからの脱出であると信じるし、少なくともポーランド国民の将来の運命にとって危険でない程度にまでそれを純化させることであると信じている。もしとうならなければ——槍騎兵のシャコー帽をかぶり、胸に勲章を下げたスパイか何かが「民族的自尊心」という太鼓を打ち鳴らし、ナントカ嫌いで巧みに国民を操つりな

がら好き勝手に引き回すことになるだろう。そしてわれわれは、たとえ、われわれ同様にソビエト主義に抑圧されている他の民族と協力できるチャンスが目の前に開けていても、すべてを無駄にしてしまう。われわれは現在の状況から逃げ出せる僥倖をただ待っていてはならない。われわれは抑圧された人々同士の連帯を築き始めねばならない。さもなければわれわれはみずから、われわれの文化的摇籃の地、西ヨーロッパへの道を閉ざしてしまうことになる。それも永遠に。自分をあざむくのはやめよう、いまもわれわれはそのヨーロッパにいるなどと。あるいは少しあは正しいかもしない、思い出と郷愁とあこがれの中ではそうかもしない。年ごとにわれわれはソビエト主義の中にますます深く沈んでゆく、われわれの価値体系、われわれの社会のきずな、われわれ自身の考える民族的伝統を崩壊させるソビエト主義の奥底へと。時々、われわれは1968年にかいまた見えた状況へと押しやられているようを感じことがある。だが希望を持とう、われわれはこうしたたぐいのあやつりにはけっして屈しないほど賢明な民族たりうるのだという希望を。

ヤン・ユゼフ・リブスキ

〔訳：高橋初子、篠崎誠一〕

【訳注】

- ① ミツキエヴィチ（1798-1855）スウォヴァツキ（1809-49）ともにポーランドの大詩人。
- ② 両大戦間期の約20年間、ポーランドは東部領土（現ウクライナ、白ロシアなど）で弾圧行為を行なった。
- ③ ヤヅヴィング 不明。読者諸氏の御教示を乞う。
- ④ ヴィエルキュ・ウーキ 現ソ連領の町。15世紀以来モスクワ公国領。1580年、ポーランド王ステファン・バトーリがこの町を攻め落とした。
- ⑤ サラゴサ スペインの町。1808-09年ナポレオン軍（ポーランド軍団を含む）が包囲し陥落させた。
- ⑥ ジェロムスキ（1861-1925）作家。『われらを啄む鳥たち』は新日本出版社「世界短編名作選」東欧編（1979）所収。
- ⑦ モチャル 1964-68年内相、反ユダヤ的タカ派。
- ⑧ スウォニムスキ 20世紀の詩人。
オッソフスキ（1897-63）社会学者・哲学者。
ヤシェニツア（1909-70）作家。以上3人いずれも反体制派。対してフィリップスキ、ゴンタシュ、コンコルは体制派の御用作家やジャーナリスト。

⑨ ここではプロシアというときは地名およびその先住民をさし、プロイセンというときは18世紀以来のドイツ人のプロイセン国をさす。

⑩ ハカタ ポズナン地域のポーランド的要素を根絶するため1894年設立されたドイツのショービニズム組織。

⑪ ヴィト・ストフォシュ（1447-1533頃） クラクフ、ニュルンベルグ等で活躍した彫刻家、画家。クラクフの聖マリア教会の祭壇は有名。

⑫ 白バラ 学生らを中心とするドイツの反ナチ抵抗組織。指導者らは処刑された。

⑬ エリウシュ・ブルシェ（1864-1942） ポーランド・プロテスタント教会の監督。ナチス強制収容所に連行され、のちベルリンの警察病院で死亡。

労働者階級とともに—ある知識人の軌跡

インタビュー スタニスワフ・バランチャク

an interview with Stanisław Baranczak

Studium PAPERS, Vol. 7, No. 2, April 1983, pp. 1-12

【編集部注】 スタニスワフ・バランチャク Stanisław Baranczak は、1946年生まれの詩人、翻訳家、文芸批評家。多数の詩集、評論集、論文がある。ポズナン大学で講師をつとめていたが、1977年、政治的理由により解雇される。ポーランド国内および外国で刊行された独立出版物の協力者として、長年にわたり公式出版の機会を奪われてきた。現在は、米国のハーバード大学のスラブ語講座の教授をつとめる。KORの創立メンバーの1人で、独立誌『ザビス』の創刊以来の編集者。1976年から1980年にかけてのポーランド反体制派の重要な宣言文書すべてに署名している。このインタビューをとった Studium PAPERS は、北米ポーランド問題研究センターが1976年以来発行している季刊情報誌。主に在米ボーランド人のインタビュー、寄稿で構成されている。なお、インタビューのタイトル、および中見出はすべてわれわれによる。紙面の都合により米国文学を論じた部分を省略した。

起点=1956年

——バランチャク教授、あなたはポズナンに生まれ、そこで教育を受けた。1956年の労働者の抗議とデモについて何か覚えているか。

たくさん覚えている。たまたま私は、デモのすべてが始まった市の中心部に住んでいた。当時私は10歳で、両親は非常に厳格で、私がアパートから出るのを許さなかった。しかし私は、叫けび声を聞いただけでなく、われわれの建物の向かいの家の屋根の上から発砲する人たちも見た。非常に緊張した雰囲気だった。しかも、デモ隊が占拠したムリンスカ通りの監獄はすぐ近くにあった。こうしたでき事すべてが私たちのすぐそばで起こった。私の両親は医者だったが、応援のためポズナンの病院にかり出された。全部の負傷者を手当する十分な医療スタッフがいなかったからだ。

——こうしたできごとがあなたに与えた長期的な影響をどう考えているか。

私は10歳で、その時までイデオロギー的な意味で私の立場はまったくはっきりしていた。私は共産党の学校で教育を受け、私が過ごしていた社会

的環境の中にはいかなる反対派的要素も認められなかった。子供ながらに私は、自分が住んでいる社会ではすべてが完全で、われわれは労働者の国に住んでいるのだと確信していた。この事件は私の目を開いた。もちろん、まだすべてを理解することはできなかったが、労働者が街頭に出て何かに抗議したという事実そのものが彼らが不満を抱いていることを意味していた。労働者国家で何かがうまくいっていないかった、このことが私にとてもない衝撃を与えた。私の中に、独自に考え、ありとあらゆる空虚なスローガンを現実と比較する能力が生えた。この能力が発展するまで長い時間が必要だったが、その発展はまさしくこの時に始まったのである。

1968年3月事件

——1968年のゴムウカによる反ユダヤ主義キャンペーンと学生や知識人に対する弾圧の時、あなたはどこにいたか。

私はポズナン大学の3年生で、ここ的学生デモに加わった。それはワルシャワやクラクフのデモ

ほど激しくはなかった。デモは町の中心のミツキエヴィチの銅像の所から始まった。また私は、反ユダヤ主義のプロパガンダとキャンペーンに抗議する大学総長宛ての学生の請願の作成と提出にも加わった。ボズナンの諸条件が許す限り最大限の活動ができたと思う。

このことが私のイデオロギー的成長のもうひとつの突破口となったと記憶している。この時まで私はまだ確信が持てなかつた。私はまだ、共産主義イデオロギーは根本的に正しくて、それは社会的正義を求める熱望の表現なのだと信じようとしていた。もちろん、現実がこれを裏切っていることは知っていた。今日のポーランドの諸条件は、カール・マルクスが想像したにちがいない鉄型にはぴったりとはまらない。しかし私の考えでは、それは基本的には、この美しいイデオロギーに到達していない人々のせいであった。奇妙に聞こえるかもしれないが何かを信じたい時はいつもこうなのだ。ただ衝撃のみが独立した思考を可能とする。私の場合その衝撃は、毎日否応なしに直面させられた反ユダヤ主義のキャンペーンとプロパガンダのウソだった。たとえば、平和的なデモに参加したその翌日、新聞で窓ガラスを打ちこわすならず者集団のことを読めば、実際に見たことと読んだことの比較が可能になる。この比較の結果は衝撃的だった。自分の目で確認できたのは、まっかな嘘以外ではありえなかつた。1968年3月は左翼的イデオロギーとの最終的訣別の始まりであつた。

——1968年3月はポーランドの文化的、知的生活に破滅的な影響を及ぼした。そこから何か積極的なものが生まれてきただろうか。たとえば、最終的には他の事態の発展につながる政治的意識の高まりがあつただろうか。

その質問にはさまざまなもの回答がありうる。個人的に言えば私は、3月事件はポーランドの文化と知的生活にとって恐るべき厄災であり、決定的な敗北以外の何ものでもなかつたと主張する人々を非常にたくさん知っている。これは一面では正しい。国外移住を余儀なくされた多数の人々を失つたのだから。知的活動のいくつかの分野が壊滅した。同時に、こうした状況の下で相応に行動ができなかつた人が非常に多數いた。これは今でも記憶されているし、彼ら自身、このことを忘れては

ならず、この記憶とともに生きなければならぬ。

私にとってもそうだが、多くの人々にとって3月事件は何かの決定的な終りであった。これが非常に重要な点である。自分の基本的な選択が何なのかを迫られる瞬間は、つねに自分にとり望ましい瞬間である。それは、より断固とした思考と行動を迫る。多くの人々にとって1968年3月事件は、恐るべき、衝撃的な事件であったが、これが彼らに真実に対する眼を見開かせ、一定の結論を引き出し、この結論の諸帰結を引き受けることを強制した。

——1968年には学生に対する労働者の支持がなかったことがいろいろ言われている。1970年に造船所の労働者がストに起つた時、ポーランドの知識人はどちらかといえば沈黙していたと非難される。こうした評価は公正だろうか。

すべて過渡に単純化されている。1968年3月には小規模ながらある程度の労働者の支持があった。ワルシャワから来た人の話では、首都では学生を支持する一定数の労働者のデモがあった。他方、忘れてはならないのは、この頃のプロパガンダがきわめて強力だったことである。政府は他の情報源をことごとく切断するのに成功した。人々は、共産主義体制転覆の陰謀をこらす何か神秘的な人間にについてウソ八百を吹きこまれた。人々は混乱し、とりわけあととあらゆる反ユダヤ主義のプロパガンダとアモをした学生の年の若さのために、何を信じればよいのかわからなかつた。非常に多くの人たちが、抗議は無責任であり、積極的なものは何ももたらさないと考えた。人々は情報に対応する準備ができていなかつたし、あまりにも危険が大きすぎて発言することもできなかつた。同じことが1970年にも起こつたが、今度は立場は逆だつた。しかし加えていくつかの新しい要素があつた。知識人によるデモが一切なかつたという事実は、彼らが精神的に労働者を支持していなかつたということではない。支持が公然と表明されることはなかつたが、その理由は、知識人たちが社会的集団としては完全な混乱状態にあったからである。彼らを結びつける共通の絆はすべて1968年3月事件で絶ち切られていた。活動的な人々の多くはまだ獄中にあり、あるいは外国にいた。その時点で、より組織的かつ断固とした方法で対応することは技術的に不可能だつた。

教会の対応

——教会は1968年に学生を支持しただろうか。それは弾圧された者を力をこめて弁護しただろうか。教会は、人権擁護のため積極的に発言し、行動しただろうか、自制的態度をとったのではなかったか。それは反ユダヤ主義バージや海外移住の強制を断罪したか、あるいは傍観的態度をとったか。

その態度は自制的だった。過度に自制的だったと言ってよい。教会もまた混乱したのだと思う。私にはこれ以外の説明は思い浮かばない。反ユダヤ主義キャンペーンが十分強く断罪されなかつたという事実は、私を非常に当惑させた何かだった。これは故ヴィシンスキ枢機卿の主要な誤りのひとつだった。もちろん、彼は偉大な人物だった。しかし十分な決意を示さなかつたことが何度かあった。決意という言葉は正しくないかもしれない。というのは彼は強い信念の人だったからである。おそらく彼は、政治のゲームには加わりたくないかったのであろう。これは3月事件に際して多くの人々が抱いた考えである。政治局の舞台の背後で何かゲームが進行しているとすべての人が疑つたが、これに加わる気は誰にもなかつた。人々は模様ながめをしていた。故大司教もそうだったので思う。しかしこれは誤りである。というのは、教会は、基本的人権が抑圧される時には常にこれに対応しなければならないからである。あれは人種差別的キャンペーンだったのであり、教会はもっと強く抗議すべきであった。

——その教会の立場は、あるいは1965年の教会に対する多數の知識人の攻撃に影響されていたのではないか。のちに「世俗左派」として知られるにいたったグループのことである。ゴムウカ時代の教会弾圧に際しての知識人たちによるこうした反啓蒙主義的非難が、1968年の学生および知識人に對するヴィシンスキの態度に影響を及ぼしたのではないか。

多分そうだろう。大学で声高に発言していた者は、もちろん教会の最良の友ではなかった。だが、大司教はもっと先を見通せたはずである。これはアダム・ミフニクがその著書『教会と左翼——ある対話』で分析しようと試みたことであるが、世俗左派と教会の和解はその時すでに始まってお

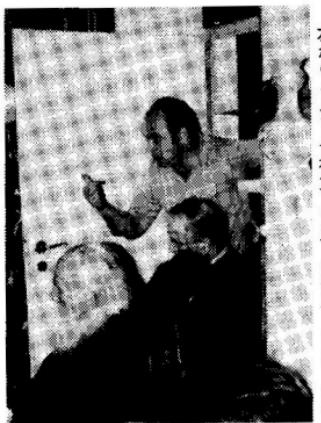
り、3月事件が勃発した時もさうに進みつつあつた。独立して思考する知識人が教会の同盟者であることを理解するには、特別の見識は必要ではなかった。私が言いたいのは、彼らが信徒や教会の一員となるということではなく、彼らの基本的な諸目標、つまり全体主義的国家の諸条件の下における人権の防衛と人間の尊厳の防衛が、教会の諸目標とも一致し、そのようなものとして教会によってより強力に防衛されるに値するものだ、と。

70年代前半の政治的雰囲気の変化

——1970年から1976年までの間に、労働者階級に対するボーランドの知識人の態度は大きく変化した。ラドムとウルススで労働者の抗議が爆発し、当局がこれを弾圧した時、あなたをはじめとする知識人たちがただちに労働者の救援に赴いた。以前と較べて対応がこんなに違つたのはなぜか。このような対応を可能とするような、知識人の再組織が、あの共通の絆の回復があったのか。

とてもたくさんのことことが起こつた。第1に、1970年以降、政治的活動家だった多くの人々が放逐された。カロル・モゼレフスキのように、少なくとも一時期、隠遁と学究生活を選んだ者もいたがヤツエク・クーロンやアダム・ミフニクのようにただちに活動に復帰した者もいた。彼らは、同じような態度をとった他の非常に多くの人たちと同様、人を惹きつける個性を持っていた。彼らには天性的知性が備わっていただけでなく、人々をひきつける能力があった。こうしたことが1970年初めに起こつた。友人たちや同じ考え方の者による非公式サークルを組織したこうした人たちの周りに反対派運動が形成され始めた。もちろん、それははるかに複雑なプロセスであった。多くの社会集団の相互作用があつたからである。たとえば私のようにアダム・ミフニクの個人的な友人であると同時に、作家同盟のメンバーである者もいた。このような場合、その人は2つの分野を結ぶ人間つながりとして機能する。このようにして、多くの相互作用が生じ、さまざまな分野から来た多数の人たちが知り合いになった。1970年代始めには独立して思考する非公式な場が、ワルシャワやクラクフ、それにある程度までポズナンその他の都市に形成されつつあった。もちろん、これはすべ

KORの結成



KORの人びと
左からJ・ジエヤ・神父、J・ルイビツキ、J・クーロン

てごく基礎的なレベルのことである。それがより決定的な行動にいたることはなかった。それは人々の間に日常レベルの連帯を形成しつつあった。1970年代半ばにかけて政治的展開が加速化はじめた時、われわれはこれに対応する少なくとも精神的な基盤を獲得していた。技術的な可能性はまだ欠けていたが、共通する精神的価値という基盤がすでにあった。

この時期の最も重要な政治的事件は1975年12月の憲法改正をめぐる論争だった。この論争は、KORが登場する前のことであり、ポーランド戦後史上決定的な瞬間であった。何か危険なことが生じつつあると誰もが知っていた。だが人々の大多数はまだ1970年12月の時の態度を維持していた。つまり、抗議は何ももたらさない、と。抗議の書簡は、事態の成り行きには何の影響も及ぼすことなく、ただ署名者たちを処罰の危険にさらすだけだと考えられた。アダム・ミフニクが憲法改訂抗議の書簡に署名者を集め始めた時、最初は全然うまくいかなかった。他の場合には非常に勇気ある人が署名を拒否した。無意味だと言うのである。アントニ・スウォムスキ——偉大な道義的権威を有していたポーランド文学界の大御所——が署名して事態は大きく変化した。このことがその時までまだ署名を決意していなかった人を動かした。同じような抗議書簡の大波が始まった。実に印象的だった。

——あなた自身の活動に戻るが、どのようにしてKORの結成に加わるようになったのか。

それはずっと1968年3月までさかのばる。3月、私は共産主義イデオロギーときっぱり手を切り、一歩づつ自己教育の道を歩みだした。同じ考えの人たちに会い、彼らから本を借りた。ポーランドではこれは人々を結びつける非常に重要な糸である。あなたが誰から文学研究所〔パリのポーランド人移民の出版社〕発行の本を借りるとする。これは2人の人間の間に相互信頼の糸を作り出す。このようにして私は、反対派——このようなものが存在するとしてだが——のメンバーと考えることのできる人たちを次々と知るようになった。たとえば、ミフニクとは実に変な具合で識り合った。70年代初め、彼はポズナン大学の特別学生だった。卒業後彼は、単位取得のために科目をとり、試験を受けることを許されていた。ただしそれはポズナンに限られ、講義を受けることは許されなかつた。こうして当局は彼をワルシャワの学生から切り離そうとしたのであった。われわれはすぐ友人に、それも親密な友人になった。ミフニクは彼の交際に基いてワルシャワの他人を紹介してくれた。このようにして友人と知人を拡大してゆく過程が全ポーランドで進行していた。真に必要だったのは、政治的意味合いをもつ行動を可能とするための人間的つながりだった。自分にとって最も重要な諸価値、友情や連帯、忠誠といった諸価値を守ろうとする——これが始まっていた。こうした防御的活動が政治的結果を生み出したとすればそれはもっぱら体制の欠陥のためだった。

——KORのメンバーは大部分がワルシャワにいた。あなたは、脚光の当たらない、西側報道機関からも切り離され、したがってより弾圧を受けやすいポズナンに住んでいた。どんな類のいやがらせを受けたか。

私は自分がKORの中で例外だったとは思わない。ポズナンに住んでいたのは例外だったが、しかしボグダン・ボルセヴィチはグダンスクに住んでいた。あそこはもっと悪かった。KORではなく他の反対派グループに属していた人たち、たとえばカトヴィツェのカジミェシュ・シフィトンはもっといやがらせを受けた。シロンスクの警察は



80年夏、グダンスク・レーニン造船所



したことはなかった。

パスポート問題は、まさに当局が私に対するいやがらせの手段として利用したのだ。それは彼らには何の危険ももたらさなかつたし、彼らは、パスポートの発給拒否権を彼らに与えていた規則の第5条——それはあいまいに規定されていて、誰をもひっかけることができた——にいつでも訴えることができた。彼らにとってそれは便利な手段で、彼らは私がKORに所属していることへの仕返しとしてこれを使った。

「連帯」の登場とKOR

——「連帯」の登場をもたらした諸力は、当然、多数あり、複雑でもある。しかし、とりわけ重要なのは、民主主義的反対派と教会である。民主主義的反対派、とりわけKORが「連帯」の登場にあたり果した役割的重要性をどう評価するか。

実のところ私はずっと「連帯」は基本的に、そして主として労働者の運動であると考えている。KORその他の民主主義的反対派の援助は、重要ではあったが、ただ一般的な意味でそうだったにすぎない。ポーランドの勤労人民全体の基礎的な要求はきわめて大きく、この彼らの要求が全人民的な運動を作り出すにいたった。KORその他の知識人グループがやったことは、生まれてくる運動に対し、自己組織化の技術的な諸問題や、当局との交渉の仕方その他について助言することだった。たぶん、こうした問題に関してはわれわれの

方が少しあたくさん経験を積んでいたし、政治的な問題について少しあたくさん本を読んでいただろう。だからといって、われわれの方が労働者より賢かったとか先が見通せたという意味ではない。むしろ逆であることが時々あったというべきだろう。「専門家」あるいはのちの「連帯」顧問たちは、とりわけ運動の政治的發展局面においてはブレーキとしての役割を果した。彼らのこうしたやり方は正しかったか。おそらく「連帯」の組合員大衆の方がずっと頭脳明晰だったと思う。最も急進的だったのは、組合員大衆だったから、これは逆説のように聞こえるだろう。しかし彼らの急進主義は当局とのやりとりの毎日の経験の結果だった。彼らは顧問たちとはちがって、ていねいな態度とか紳士的なふるまいとかには欺されなかった。労働者たちは、当局が本当は何を望んでいるか、いかなる約束も守ろうとしない彼らの真の意図が何かを見ることができた。ワイドの映画の中で高官の1人が「約束なんかすべて紙切れさ」と言う場面を覚えているだろう。これこそがまさに最初からの彼らの態度だったのだ。当局には約束を守るつもりは全然なかった。労働者たちはこのことをよく認識していた。だから彼らは急進的だったのだ。

1981年12月：戒厳令

——1981年12月はわれわれすべてにとり衝撃だった。それは不可避だったのか。党官僚が現状維持

に巨大な利害を有している以上、それは避けられなかったのか。「連帯」とその顧問たちは警察および官僚機構からの支持を引き出す内部決起の可能性を無視したのではないか。

この問題をめぐってはこの先長く、ずっと議論が続けられてゆくだろう。この質問に今、全面的に答えることは不可能である。ただ、そのような発展の危険性は考慮されていたとは言える。しかしこれに備えることの実際的諸帰結は、「連帯」の存在条件の範囲内では実現できなかつた。今になつてみれば、緊急事態ないし戦争状態に際して代行権限を与えられた「影の内閣」を準備するという戦略がとられるべきだったということはたやすい。しかしもしも「連帯」がそのようにしていたならば、組合をひとつに結びつけてきた民主主義的ルールのすべてが破壊されてしまったであろう。そのような内閣は選挙で選ばれず、ただ「連帯」指導部によって、組合員大衆の意志を無視して任命されることになったろう。それはまた秘密にしておかなければならなかつたはずである。これも「連帯」を支配するすべてのルールに反する。とることができたかもしれないどのような予防措置も、「連帯」のこうした基本的な考え方のどれかに背反したであろう。これは抽象論ではない。なぜなら、「連帯」の成功はその民主主義的性格、そのあけっぴろげの性格、その公然たる活動の結果だったからである。ひとことで言えば、それは地下の陰謀的活動とは正反対のものすべてだった。これが、ポーランドで陰謀的活動の危険は冒したくないと考えた人々の多くを引きつけた理由である。そのあけっぴろげのやり方のゆえに多くの人々をひきつけた「連帯」は、この性格を維持することを強制された。とることができたかもしれない眞の予防的措置はすべてこの性格を破壊したであろう。

——「連帯」が人を惹きつけた最も重要な性格のひとつは、それがその16カ月間の合法的存在期間の全体を通じて、非暴力的な平和的な運動だったことである。戦後期の暴力的な抗議やポーランド史における反乱の伝統を考える時、これはきわめて異例に思われる。この見方は皮相だろうか。

答は簡単である。人々は1956年のポズナンの経験や1970年のバルト海沿岸でのデモから学んだのだ。いかなる暴力的抗議も不可避的に弾圧と流血



をもたらすことが理解された。どの家庭でも誰かは大戦中に殺され、あるいは共産党政権下で迫害されているポーランドのような国では、人々はこのような危険の避け方を学んでいた。しかも、いかなる形態の暴力的抗議も体制に対し人民を弾圧する法的工具を与えるがゆえに、それは非効果的である。1980年のできごとは、人々がきわめて大衆的な規模で聰明な結論に達したことを示した。彼らの抗議は体制側を完全に武装解除するために平和的でなければならなかつた。彼らは正しかつた。なぜなら、彼らの行動は「連帯」の最初の最も決定的な数カ月間、当局を麻痺させたからである。

——将来についてどう考えるか。ヤルゼルスキの軍事評議会は、ポーランドにこのような政治的、経済的、社会的危機をもたらした背景にある諸問題の解決に向け、1歩も前進していない。ふたたび緊張が高まりつつあるように見える。ワレサは抗議行動やハンスト、ストライキなどの呼びかけを声高に語っている。造船所労働者は今ふたたび「連帯」の復活を要求している。われわれは再度の全面対決を迎えるとしているのか。危機の平和的解決は期待できるか。

非常に難かしい質問である。今の時点で将来を予見することは誰にもできない。いま眼前にいる争いがどう解決されるか、誰にも想像さえできない。それは前例のない情勢であり、何かを予見することは不可能である。今できることは、こうした発展の中に何か不变の要素を明らかにすることである。最も重要な要素は人民の抵抗である。人民は現在の状況の下ではもうこれ以上生きてゆけない。それは単に物質的諸条件や生活水準の問題ではない。人々がもううんざりしている抑圧的な雰囲気の問題でもあるのだ。この2つの要素、

つまり物質的窮屈と毎日の生活の抑圧的雰囲気が生活を不可能とし、人民の絶え間ない抵抗の原因となっている。他方、現体制は簡単には断念しようとはしない。それは、比喩的に言えば、政府にとり生か死かの問題である。国に対する締めつけを少しでもゆるめれば、それは支配力の喪失に、守護者の地位の喪失につながる。彼らが最も恐れているのはこれだ。解決不可能な状況が現出するかもしれない。2つの結果がありうる。われわれは、武力対決——これは想像さえしたくないが——に直面するかもしれない。あるいは国際的な力のバランスの変化——これも推測するのが困難である——を迎えるかもしれない。西側がより積極的にソ連に対し圧力を加えることもありえよう。これが重力の中心をいくらかでも移動させるとすれば、それはポーランドだけでなく、自由を求めて闘っている他のいくつかの抑圧されている諸国——たとえばアフガニスタン——が最終的に自由になるのを可能とするかもしれない。それは限定された自由、ある種のフィンランド化——この言葉はポーランドでは嫌われているが——かもしれない。それでもそれは一種の中間段階たりうる。私が言っているのは遠い将来のことかもしれない。いまの質問にこれ以上答えることはできない。

詩と詩人の役割

——あなたの詩のことについてどうして詩に関心をもつようになったのか。なぜ詩人にならなかったのか。

誰も決意して詩人になるわけではない。逆説的ではあるが、書くことは読むことから始まる。書くのは、自分が愛する詩人を真似たいと思うからだ。高校生だった頃、私は昔の、また現代のいくつかの詩を読み始め、そんな気持になった。私は詩の愛好者なら誰でも等しく感じるある感情、つまり自分自身のやり方で表現してみたいという気持を体験した。詩人なら誰もがうまくつかみとる感情である。これこそ創造のメカニズムの働きである。崇拜する詩人の高みに自分も立ちたいと望む。それも自分自身のやり方で。私が最初にモノを書き始めたとき、それはできあがったパターンの模倣だった。それは、私の生涯における何度かの失望を経て自分の全般的人格が変化するにつ

れて、より本物に、より私自身のものになっていった。1968年3月の政治的失望のあと、私は本物の作品を書き始めた。私の詩は以前よりも眞の生命を持つようになった。その基礎に内面的闘争があったからだ。私は現実とは矛盾する確信を抱いており、これが内面的闘争を作り出した。それは、私自身の言葉で表現された私自身の感情、私自身の姿勢だった。……

——あなたは米国に数年ぶりで来た。社会の中ににおける詩人の位置は、米国とポーランドではどう違うか。

私は昨年夏、東ヨーロッパの詩人と自由世界の詩人の間の相違について若干のことを書こうとした。全体主義諸国では詩人は抑圧されているが、しかし少なくとも誰かが詩人の面倒を見ているとよく言われる。しかしこれは単純化されすぎている。このような意見の持主に対し、全体主義諸条件の下で暮してみると勧めるようなことはしない。それはどちらかといえば不快な経験であるからだ。われわれ全体主義諸國の詩人がこのような代價を支払わねばならないとしても、それはわれわれがこうした諸条件を受け入れていること、状況と妥協していることを意味するものではない。ポーランドで詩人たちがやっていることはこのような抑圧の重荷から自らを解放しようとする試みである。しかし忘れてはならないことがある。何の義務もなく何の圧力も受けない、まったく自由な詩人、まったく自由な作家になることは危険かもしれない、と。自分が必要とされているという意識を一部失うからだ。抑圧の条件下では、詩人は人民のために書き、この人民から実際に必要とされている。いつもこんなに簡単とは限らないが、しかしこの可能性は少なくともきわめて現実的である。詩人の読者は詩人と同一の状況下にあって、自分たちの基本的な気持を表現できる人を必要としている。自由世界ではこのような危険はありえない。しかしだからといって詩が悪くなる、あるいはその価値が低くなるとは考えられない。このことが意味するのは、ただ詩人は社会の中に自分の位置を見出さなければならず、それはポーランドやソ連におけるよりも困難であろう、ということである。それは決して不可能ではない。米国にも、いろいろ不満はあっても、本当に必要とされている詩人がいると思う。その読者は、小説作家

やベストセラー作家に較べれば限られているが、詩とはいつもそうである。読者の数は限られている。きわめて当然のことだ。

——たとえばポーランドのように、詩人が必要とされるというのは否定的な現象ではないのか。ポーランドでは、抑圧に対する関心の深さは19世紀の分割時代までさかのぼる。ポーランドの独立という一種の強迫観念へのテーマの限定は、創造力に対しきわめて否定的な影響を及ぼすのではないか。

詩における紋切り型、詩における旧慣墨守はもちろん誰の創造力に対しても否定的な影響をもたらす。たとえばポーランドのように、抑圧が存在し、少なくとも分割時代以来断続的に抑圧が存在してきた国においては、詩はロマン主義の時代以来同じ役割を果してきた。詩が他の知的活動領域の事実上すべての代替物として伝統的なロマン主義的役割を遂行するだけのものに成り下がってしまうこの上もない危険が存在する。ポーランドのロマン主義文化においては、詩は政治的思想や社会的分析、あるいは未来学さえもの代替物であった。ひるがえってこのことが社会の中の作家的地位に影響した。重要な、真にその名に値する作家は、ポーランド語でいうヴィエシチ、すなわち国民の精神的指導者でなければならなかった。これは創造力を妨げる怨るべき負担である。このために彼は詩における旧慣墨守の奴隸となる。あえて言っておきたいのだが、これは、現在、戒厳令下のポーランドおよび外国で書かれている最近のポーランドの詩の大部分にも内在し、認められる危険である。最近の詩は2つのまったく異なるカタゴリーに分けることができる。ひとつは、殉難や苦悩といったありとあらゆる陳腐さが込められた旧来のロマン主義的旧慣墨守の詩である。たしかにそれは日々の生活の現実である。しかしながらといってそれを詩の言葉で語らなければならないということではない。詩は何か新しい道を見出さなければならず、これこそがもうひとつのカタゴリーの詩人たちがやっていることである。それはヴォロシルスキやザガエフスキといった詩人によって代表される。彼らは新しい現実の表現方法を模索している。彼らが興味を抱くのは、現に生起しつつあることであって、旧態依然たる苦悩や殉難のパターンではない。要するに彼らは、現実を



表現し、これに詩の形式を与えていにすぎない。この点で彼らは大成功を収めている。これは外的状況に対するふさわしい対応である。

——あなた自身の詩には政治的含意があり、時にはそれが公然と表されている。たとえば、あなたの最近の詩、「秩序の回復」である。あなたの仕事において、政治と詩はどんな関係にあるのか。

私は自分が政治的詩人であるとは考えない。私はいつもまったく個人的な詩を書いてきた。それはねにまったく個人的な視点から語られる詩である。それが私の視点である必要はない。他人の声を引用符の中に入れたような詩もいくつかある。それは法廷で語られるべき何か公けの意図をもった公けの声の詩ではない。たまたまそのようになったとしても、それは私の個人的な問題が外部で進行しているものに收れんするからにすぎない。今日のポーランドにおいて詩がおもしろいのはこのためである。自分の最も個人的な問題が同時に社会の問題である。両者の違いは、規模の大きさあるいは量の多少にすぎない。具体例をひとつあげよう。「トリプティク」というタイトルの私の最新のポーランド語の本で、住み家としての、つまり現代ポーランドにおける生活様式としての共同住宅に関する一連の詩を書いた。これは、私がいうところの干涉詩、つまりポーランドの住宅問題の解決を狙った詩ではない。それは、そのような典型的な共同住宅での私自身の生活経験をつづったものである。ポーランドの多くの人々がそのように生活しているがゆえに、それはたまたま典型的なものとなったのだ。多分私は、他の人々にも意味のある何かを表現できた。だが出発点はあくまでも個人的なものだった。【訳：水谷 駿】

ワルシャワ裁判に反対する委員会のアピール

Appel du Comité contre les procès de Varsovie, mars 1983. Le KOR, p.115

【編集部注】フランスにおけるワルシャワ裁判——旧KORの5人と「連帯」の7人に対する政治裁判——反対キャンペーンの開始を宣言する文書。本誌15号10頁を参照。

ワルシャワ裁判に反対する委員会は、ポーランドの全般的な状況に基いて活動する。それはおよそ次のようにとらえることができる。昨年12月末に戒厳令は停止された。が、それに先立つ数ヵ月間、ポーランドの事実上の権力者たちは国会で一連の法律を可決させ、戒厳令「停止」の外観の下に本質的な抑圧手段をそのまま維持できるようにした。こうして一時的な非常状態が恒久的な非常事態に転化された。他方、権力者たちはポーランドの再生を可能とする方策を何ら講じなかった。この事態に直面してポーランド国民の大多数は、「連帯」が非合法化されたにもかかわらず、さまざまな形により組合に対する忠誠を守った。そのうえ「連帯」は地下活動の中で組織を保ち、その行動能力を示して今日にいたっている。この数日のデモがこのことを証明している。最後に、事実上の権力に対する加担は、個人的にであれ、組織的にであれ、重要なものはひとつもなかった。教会は警戒をゆるめていない。

しかしわれわれは、ポーランドのすべての友人たち、組合の権利と人権を擁護するすべての人たちに対し、現在準備が進められている2つの裁判に反対するよう呼びかけなければならないと考えた。すなわち、旧KORのメンバーに対する裁判と、昨年12月末、他の囚われの人々とともに釈放されるどころか、拘禁から逮捕へと切り替えられた「連帯」の指導者7人に対する裁判である。

それはまず何よりも、この告訴が恒久的不法の中にあってとりわけ不法なものだからである。戒厳令の布告それ自体がそれ以前の行為を理由とした告訴はないと厳粛に誓約していたにもかかわらず、1981年12月13日に拘留、逮捕されたこれらの人々すべてに対し、この日以前のまったく合法的な、公認の組合活動の枠内での行動が非難されている。したがって、いま準備されている裁判は、

1000万人の組合員を擁しポーランド人民の圧倒的多数を代表する労働組合、「連帯」そのものに対して向けられている。

他方この裁判は、東ヨーロッパ諸国にのしかかるソビエト体制内部における昔の裁判——モスクワ裁判、プラハ裁判——に一直線につながる。もちろん、この裁判が実施されるとしても、その形式は昔の裁判とは異っているし、異ったものとなる。しかし改めて強調しなければならないのは、この裁判がもはや共産党内部の個人、グループ、潮流を裁くものではなく、1000万を擁する組合、ポーランド国民そのものを裁くものであることがある。最後に、この裁判がまず確実にポーランドにおいて、そして恐らくは東側において、裁判の新しい形式を決める大きな可能性が存在する。自由の身にある人々は、モスクワとプラハの裁判に対し、それが実施されてしまったあとで抗議した。今日、この裁判に反対する抗議と行動はそれが実施される前になされなければならない。そうすれば一層、この行動によって裁判を阻止し、その経過と結論に影響を及ぼす可能性が大きくなる。

そこでわれわれは今日、2つのアピールを発する。第1は、マスメディアに対し、われわれのキャンペーンのもととなる情報を拡め、このアピールの文書の流布と署名の収集を助けるよう求めるものである。

第2は世論に対するアピールである。フランスの世論はポーランド人民との連帯の意志を表明した。それは、ポーランドにとてだけでなく、ヨーロッパと自由な諸国民すべてにとての問題の重要性を理解した。われわれは、文書への多数の署名を訴える。それはたんに容認しがたいことに対する抗議だけでなく、人権と自由と平和を脅かすものを後退させる行動でもある。

1983年3月

ワルシャワ裁判に反対する委員会

ミシェル・ブルエ、ミシェル・フーコー、アンヌ・グリュクスマン、ジャック・ルゴフ、クシシュトフ・ボミアン、シモヌ・シニョレ、アレクサンデル・スマラル、ポール・チボ

SOLIDARNOŚĆ

News

れんたい
ニュース

【編集部注】「連帯」在外調整局が発行する『ソリダルノシチ・ニュース』（英文）から、「連帯」の国際活動に関する短信を、今後、随時紹介する。

イエジ・ミレフスキ「連帯」在外調整局代表3名が、5月9~15日、ベルリンで開かれた第2回ヨーロッパ非核会議にオブザーバーとして出席。大会には250人の労働組合代表が参加、西側の民主主義諸国における平和運動と東側の真に人民的基盤を有する平和運動の結合の重要性、そして人権問題が世界平和の問題と密接に関連していることが確認された。

フランスの労働組合全国組織のひとつ、FO（労働者の力）パリ地区議長が、5日、レーニン造船所を訪問し、レフ・ワレサ、アンナ・フレンティノヴィチ、および投獄されている「連帯」活動家の家族たちと会談する。

AFL-CIO執行委員会のポーランド問題に関する声明。5月24日発表のこの声明は、ポーランド国民の圧倒的多数が「連帯」に対する支持を今なお表明し続けていること、戒厳令は政府当局とポーランド社会の間のギャップを拡大したことを指摘し、米国その他の西側銀行がポーランドの債務返済期限の延期交渉を進めていることを非難している。

フランス・キリスト教労働者連合（CFTC）のジャン・ボルナル会長が6月初め、暫定調整委員会およびL・ワレサと会談。

「連帯」代表が6月初め、スペイン労働総同盟第33回全国大会に出席。総同盟執行委員会は、ポーランドの現在の社会的・経済的危機は、真の労働組合組織の参加なしには解決不可能であるという声明を発表。

パリで3000名以上の労働組合員および「連帯」支持者がきたるべき「連帯」指導者および顧問に対する政治裁判に反対する集会に参加。6月15日のこの集会は、全世界からすでに4万人以

上の署名者を集めた「ワルシャワ政治裁判」を断罪する請願キャンペーンの宣伝を目的として開かれた。集会では、フランスの労働組合全国組織であるCFDT、CFTC、CGC、FEN、FOの全国ないし地方指導者が、ポーランドで今なお続く労働組合員に対する弾圧を非難して発言。集会に招かれたイエジ・ミレフスキ「連帯」在外調整局代表は次のように述べた。「われわれは常に胆に銘じておかなければならない。本日のこのような集会や、請願への署名集めであれ、手紙であれ、大規模なデモであれ、われわれの大義に対する積極的な支持のあらゆる表明が、ポーランドにいるわれわれの友人にとり巨大な意味を有していることを。それは彼らを勇気づけるだけでなく、同時に政府当局を抑制する役にも立つ。彼らは、公式には拒否しているとはいえ、国際世論を考慮しなければならないからである」。このキャンペーンは今後も継続される。

ミラノ市議会、ポーランド「連帯」に対し3万5000ドルを贈ることを全会一致で決定。6月17日に行われた贈呈式には、カルロ・トグノリ市長とイエジ・ミレフスキ「連帯」在外調整局代表が参加。このあとミレフスキは地元労働組合指導者と会談する。

国際自由労連（ICFTU）第13回世界大会に「連帯」在外調整局代表イエジ・ミレフスキが出席。ミレフスキは6月27日、本会議で演説し、ポーランド「連帯」への支援を訴えるとともに、「連帯」議長レフ・ワレサおよび暫定調整委員会のメッセージを読み上げる。大会は最終日の6月30日、ポーランド「連帯」支持を確認する決議を採択、加盟各國労組に対し具体的な支援行動を呼びかける。また大会代議員名で、「連帯」議長レフ・ワレサ、およびZ・ブヤクら暫定調整委員会メンバーに対し公開書簡が発送される。

[SOLIDARNOŚĆ News No.1~3]

ポーランド日誌 (83・6・3~30)

6月3日 PAPによると、前駐日ボーランド大使館員が外国の情報活動に協力したとして帰国と同時に逮捕される。

6月5日 活動停止中の映画製作業者同盟(SFP)はワルシャワで執行委員会を開き、アンジェイ・ワイダ監督を議長とする幹部会の総退陣を承認する。ワイダは「同盟が解散させられないように辞任を申し出た」という。

6月6日 ヤルゼルスキとグレンブ枢機卿は法王訪問期間中の平静を訴える。

6月9日 ワレサ、法王に会うための休暇申請を却下される。

6月10日 クラクフのラジオ「連帯」放送局と3つの印刷所が摘発され、あわせて7人の学生を含む10人が逮捕、多数の出版物や備品が押収されたという。

6月11日 ワルシャワ・ラジオによると、工場を超えた最初の労働組合連合組織、金属労組連合がカトヴィツェで創設される。

6月13日 ポーランド政府は、対西側債務250億ドルを8年間の猶予期間を置いて、20年間で償還することを西側銀行團に提案する方針を明らかにする。

6月14日 法相は、法王訪問が平穏に行われれば、訪問後の戒厳令解除もありうると述べる。政府は、逮捕中のKORメンバー、ヤン・リティンスキが短期間外出を許可された後、戻ってこないと発表。法王訪問地での酒類の販売が禁止される。

6月15日 ラコフスキ副首相は「法王訪問が東西関係の緊張緩和につながるとともに、ポーランドの国際的な政治的、経済的孤立が終わるよう期待する。法王の言動やそれに対する国民の反応は戒厳令解除の重要な要素となる」と述べる。ラジオ「連帯」の放送でZ・ブヤクは、「連帯」の名にかけて法王を歓迎すると語り、「連帯」は健在であり、その支持者は法王から力を引き出すと述べる。「連帯」在外調整局代表J・ミレフスキはジュネーブで開かれた第69回ILLO総会で演説し、「連帯」は労働組合として機能し続けており、全世界の何百万の勤労人民に共通する同じ目的と理想のために平和的に闘っていると述べる。ハンガリーの宗教相、法王のポーランド訪問はポーランドの教会と政府及びバチカンの利益にかない、その成功を期待すると述べる。同じ日、チェコのCTK通信は法王のポーランド訪問の真の目的はポーランドにおける教会の

影響力強化にあると語る。アルバニアのティラナ放送は、ヤルゼルスキ修正主義派は大衆を手なづけ、自らの権力を維持するためにカトリック教会とバチカンの影響力を利用しようとしている」と述べる。

6月16日 ヨハネ・パウロ2世、ワルシャワに到着、ヤブロンスキ国家評議会議長、グレンブ枢機卿らに迎えられる。空港から旧市街の聖ヤン教会に直行し、そこで最初のミサ。ミサ後、数万の群衆がVサインを掲げ「ソリダルノシチ」と叫びながら党中央委員会の建物まで市中をデモ。

6月17日 ベルヴェデレ宮殿で公式の法王歓迎行事、法王は国民的対話の実現を要請する。その後、ワルシャワの国立野外スタジアムで150万人の群衆を前にミサ。「高貴な勝利は敗北を通して得られる」と説く。法王がグダンスクからの巡礼者を紹介すると会場は大きな拍手に包まれ、「連帯」の横断幕が掲げられ、「ソリダルノシチ」の連呼が起きる。ミサ後約1万の群衆が「連帯」支持を叫んでデモ。ウルバン政府スパークマンは戒厳令の解除が法王との会談でとりあげられることはありえない」と語る。

6月18日 法王、午前中ワルシャワ・ゲットー蜂起の記念碑に花を捧げる。午後、チエンストホヴァに。夕方、全国から集まつた約60万の若者との集会で人間の連帯を説いた時、満場が拍手とVサインで応える。集会後、数千人がデモに繋り出し、「連帯」とワレサ支持を叫ぶ。警察は介入せず。モスクワ放送、西側のマスコミは法王がワレサと会うかどうかの問題にしか関心を示さない」と述べる。

6月19日 チエンストホヴァのヤスナグラ修道院の600年記念祭のミサで法王は「憎しみは破壊をもたらす力だ。争いはつねに避けなければならない」と述べる。その後ポーランド司教會議に出席。ウルバン政府スパークマンはポーランド・カトリック教会が「連帯」支持のデモを約束に反して放任していると警告する。この日終わったECC首脳会議は「国民的和解を通じてのみ、ポーランドは危機から脱却できる」と声明。

6月20日 法王は朝ボズナンに到着、90万人を前に説教。「農民連帯」の名を挙げ「その闘いは正当である」と説く。ミサ後、群衆の一部が1956年事件記念碑に向かってデモ行進を始めたが警察に阻止される。午後法王はカトヴィツェに到着。150万人を前に「労組結成は労働者の権利に含まれる」と「連帯」擁護を鮮明にする(本誌2~3頁参照)。この日、東京でポーランド政府代表が日本政府に経済協力を要請する。

6月21日 法王、ヴロツワフに到着。100万人以上の群衆を前にミサ。「ドイツ人との未永い友好」を説く。

午後、第1次大戦後の対独戦勝記念碑のある聖アンナ山を訪れ、約100万の信者に向かって民族的一体性を訴える。ラコフスキ副首相はPAPとのインタビューで法王の説教を間接的に厳しく批判。ヴロツワフでのミサ後、市民・労働者のデモ隊と警官隊が衝突。

6月22日 法王、古都クラクフでミサ。200万人近くが集まり、今回の訪問中最大の集会となった。ミサ後、ノヴァフタへ向けて参加者約20万人が「連帯」支持のデモを開始。夕方、ノヴァフタの教会でミサ。夜、クラクフのヴァヴェル城でヤルゼルスキ首相と2度目の会談。この日未明、平和世界会議が開催されたプラハで、約300人の青年達が反戦デモを敢行。

6月23日 法王、極秘裡にワレサと会見した後、帰國の途に。ウルバン政府スポーツマンは、「訪問は双方にとって成功」と述べ、早ければ7月22日にも戒厳令解除の可能性があると語る。また、「『連帯』はボーランド史——それも決して明るくはない歴史の1章に属する」と述べて「連帯」との対話を拒否する。

6月24日 ワレサ、米NBC放送とのインタビューで、党政当局との交渉から身を引く可能性を示唆。宗教相、国会で法王訪問に満足の意を表明。ボーランド政府、ILLOとの協力関係を停止。

6月25日 パチカンの半公式紙が「ワレサは舞台から

退場する。彼は開いて敗れた」と報じる。この日、ラドムで1976年事件7周年記念の公式行事が行われる。6月26日 ワレサ、西側記者の質問に答え、「私は戦列からねずみのように逃げ出しあしない」と語る。6月27日 オスロで開かれている国際自由労連第13回世界大会は「連帯」支援を約束するワレサあて公開書簡を発表。最終日の30日「連帯」支援決議を採択。

6月28日 ポズナンで1956年6月28日の事件（労働者70余名が殺された）を記念する公式行事の途中で、平和的デモが展開される。この日から2日間モスクワでワルシャワ条約機構諸国首脳会議が開催される。西側諸国、対ポーランド債権国会議の7月末パリ開催を決める。パチカンの消息筋によれば、ボーランド政府と教会の間で西側からの資金数百万ドルを利用してボーランド経済復興のための教会が運営する開発基金設立の合意が成立しているという。

6月29日 教会=政府合同委員会は法王訪問の成功に満足の意を表明。

6月30日 シエチエンの「連帯」幹部エドムント・パウカに国家転覆罪により懲役5年の判決。政府当局によれば新労組は1万6000組合、300万人に達したという。

〔編：鶴崎公敏／水谷駿〕

編 集 後 記

☆間もなくグダンスク協定3周年を迎えます。この機会に「連帯」運動のボーランド現代史に占める位置をあらためて考えてみたいと、2本の長篇を一挙掲載することにしました。とくにリブスキ論文は長大ですが、「連帯」がその長期的展望を近隣諸民族との友好に置こうとしている事実を考えれば、重要な問題を提起していると思われます。

☆ローマ法王の訪問の成果を誇る形で、戒厳令の解

除が発表されました。「連帯」を非合法化した新労組法の存在や、非常事態規定を明確化した憲法の改訂、それにさまざまな特別措置法を考えれば、暫定調整委声明が述べているように、これは西側に向けたゼスチャーにすぎないと考えます。

☆本号は夏の合併号とし、次号は10月初旬刊の予定です。事務局一同、8月10日から27日まで夏休みをとらせて頂きますのでご了承下さい。この間の事務局への連絡は郵便にてお願いします。

1983年7月25日 (み)

模索舎年鑑'82

• 680円 (税込200円)

自主出版物目録81.8~82.12

ミニコミ・自主出版物取扱書店

定期刊行物発行者(団体)連絡先リスト

ベストセラーにみる自主出版物の状況 他

模索舎

東京都新宿区新宿2-4-9 Tel03-352-3557